

源氏物語

宿り木卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

宿り木

紫式部

與謝野晶子訳

あふけなく大御おほみむすめをいにしへの人
に似よとも思ひけるかな
(晶子)

そのころこうきゆう ふじつば後宮で藤壺と言われていたのは亡き左大臣の女むすめの女御で
あった。帝がまだ東宮でいらせられた時に、最も初めに上がった人で
あったから、親しみをお持ちになることは殊に深くて、御愛情はお持

ちになるのであつたが、その形になつて現われるようなこともなく
て歳月がたつうちに、中宮のほうには宮たちも多くおできになつて、
それぞれごりっぱにおなりあそばされたにもかかわらず、この女御は
内親王をお一人お生みすることができただけであつた。自分が後宮の
競争に失敗する悲しい運命を見たかわりに、この宮を長い将来にかけ
て唯一の慰安にするまでも完全な幸福のある方にしたいと女御は大事
にかしずいていた。御容貌ようぼうもお美しかったから帝も愛しておいにな
り、中宮からお生まれになつた女一にょいちの宮を、世にたぐいもないほど帝
が尊重しておいでになることによつて、世間がまた格別な敬意を寄せ
るという、こうした点は別として、皇女としてはなやかな生活をして
おいでになることではあまり劣ることもなくて、女御の父大臣の勢力

の大きかった名残なごりはまだ家に残り、物質的に不自由のないところから、女二の宮の侍女たちの服装をはじめとし、御殿内を季節季節にしたがって変える装飾もはなやかにして、派手はででそして重厚な貴女らしさを失わぬ用意のあるおかしずきをしていた。宮の十四におなりになる年に裳着もぎの式を行なおうとして、その春から専心に仕度したくをして、何事も並み並みに平凡にならぬようにしたいと女御は願っていた。自家の祖先から伝わった宝物類も晴れの式に役だてようと捜し出させて、非常に熱心になっていた女御が、夏ごろから物怪もののけに煩わずらい始めてまもなく死んだ。残念に思召おぼしめされて帝もお歎きになった。優しい人であったため、殿上役人なども御所の内が寂しくなったように言つて惜しんだ。直接の關係のなかった女官たちなども藤壺ふじつばの女御を皆しのんだ。

女二の宮はまして若い少女心にお心細くも悲しくも思い沈んでおいで
になろうことを、哀れに気がかりに思召す帝は、四十九日が過ぎると
まもなくそつと御所へお呼び寄せになった。その藤壺へおいでになつ
て帝は女二の宮を慰めておいでになるのであった。黒い喪服姿になつ
ておいでになる宮は、いつそう可憐かれんに見え、品よさがすぐれておいで
になった。性質も聡明そうめいで、母の女御よりも静かで深みのあることは少
しまさっているのをお知りになって、御安心はあそばされるのであつ
たが、実際問題としてはこの方に確かな後援者と見るべき伯父おじはな
く、わずかに女御と腹違いの兄弟が大蔵卿、修理大夫だゆうなどにいるだけ
であつたから、格別世間から重んぜられてもいず地位の高くもない人
を背景にしていることは女の身にとって不利な場合が多いであろうこ

とが哀れであると、帝はただ一人の親となってこの宮のことに全責任のある気のあるあそばすのもお苦しかった。

お庭の菊の花がまだ終わりがたにもならず盛りなころ、空模様も時^{しぐ}雨^れになって寂しい日であつたが、帝はどこよりもまず藤壺へおいでになり、故人の女御のことなどをお話し出しになると、宮はおおようではあるが子供らしくはなく、難のないお答えなどされるのを帝はかわいく思召した。こうした人の価値を認めて愛する良人^{おと}のいないはずはない、朱雀院^{すざく}が姫宮を六条院へお嫁^{とつ}がせになった時のことを思つてごらんになると、あの当時は飽き足らぬことである、皇女は一人でおいになるほうが神聖でいいとも世間で言つたものであるが、源中納言のようなすぐれた子をお持ちになり、それがついているために昔と変わ

らぬ世の尊敬も女三の宮が受けておいでになる事実もあるではないか、そうでなく独身でおいでになれば、弱い女性の身には、自発的のことでなく過失に墮^おちてしまうことがあつて、自然人から輕侮を受け結果になつていたかもしれぬと、こんなことを帝は思い続けになつて、ともかくも自分の位にいるうちに婿をきめておきたい、だれが好配偶者とするに足る人物であろうと思ひになると、その女三の宮の御子の源中納言以外に適當な婿はないということへ帝のお考えは歸着した。内親王の良人^{おっと}としてどの点でも似合わしくないところはない、愛人を他に持つていたとしても、妻になつた宮を辱^{はずか}しめるようなことはしないはずの男である、しかしながら早くしないでは正妻というものをいつまでも持たずにいるわけはないのであるから、その前に

自分の意向をかれにほのめかしておきたいとこんなことを帝は時々思召した。

ある日帝は碁を打っておいになった。暮れがたになり時雨しぐれの走るのも趣があつて、菊へ夕明りのさした色も美しいのを御覧になつて、蔵人くらうどを召して、

「今殿上の室にはだれとだれがいるか」

と、お尋ねになった。

「中務卿親王なかつかさきょうしんのうこうずけ、上野の親王しんのう、中納言源ちゅうなごみなもとの朝臣あそんがおられます」

「中納言の朝臣をこちらへ」

と、仰せがあつて薫かおるがまいった。實際源中納言はこうした特別な御愛寵あいちょうによつて召される人らしく、遠くからもおう芳香をはじめとし

て、高い価値のある風采ふうさいを持っていた。

「今日の時雨しぐれは平生よりも明るくて、感じのよい日に思われるのだが、音楽は聞こうという気はしないし、つまらぬことにせよつれづれを慰めるのにはまずこれがいいと思うから」

と帝はお言いになって、碁盤をそばへお取り寄せになり、薫へ相手をお命じになった。いつもこんなふうに親しくおそばへお呼びになる習慣から、格別何でもなく薫が思っていると、

「よい賭物かけものがあつていいはずなんだがね、少しの負けぐらいでそれは渡せない。何だと思う、それを」

という仰せがあつた。お心持ちを悟ったのか薫は平生よりも緊張したふうになっていた。碁の勝負で三番のうち二番を帝はお負けになっ

た。

「くやしいことだ。まあ今日はこの庭の菊一枝を許す」

このお言葉にお答えはせずに薫は階きざはしをおりて、美しい菊の一枝を折って来た。そして、

世の常の垣根かきねににほふ花ならば心のままに折りて見ましを

この歌を奏したのは思召しに添ったことであつた。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど残りの色はあせずもあるかな

と帝は仰せられた。こんなふうにおりおりおほのめかしになるのを、直接薫は伺いながらも、この人の性質であるから、すぐに進んで出ようとも思わなかった。結婚をするのは自分の本意でない、今までいろいろな縁談があつて、その人々に対して気の毒な感情もありながら、断わり続けてきたのに、今になって妻を持つては、俗人と違ふことを標榜ひょうぼうしていたものが、俗の世間へ歸った気が自分でもして妙なものである。恋しくてならぬ人ででもあればともかくもであるがと否定のされる心でまた、これが后腹きさきばらの姫君であれば、そうも思わないであろうがと考える中納言はおそれおおくもあまりに思い上がったものである。

この話を左大臣は聞いて、六の君との縁組みに兵部卿ひょうぶきやうの宮の進まぬ

ふうは見せられても、薫は一度はああして断わってみせたものの、ねんごろに頼めばしぶしぶにもせよ結婚をしてくれるはずであると樂觀していたのに、意外なことが起こってきそうであると思い、兵部卿の宮は正面からの話にはお乗りにはならないでいて、何かと六の君に交渉を求めて手紙をよくおよこしになるのであるから、それは真実性の少ないものであっても、妻にされれば御愛情の生じないはずもない、どんなに忠実な良人おっとになる人があっても地位の低い男にやるのは世間体も悪く、自身の心も満足のできないことであろうからと思つて、やはり兵部卿の宮を目標として進むことに定めた。女の子によい婿のあることの困難な世の中になり、帝みかどすらも御娘のために婿選びの労をおとりになるのであるから、普通の家の娘が婚期をさえ過ぎさせてし

まっではならぬなどと、帝のお考えに多少の非難めいたことも左大臣は言い、中宮へ兵部卿の宮との縁組みの実現されるように訴えることがたびたびになったため、後の宮はお困りになり、宮へ、

「気の毒なように長くそれを望んで大臣は待ち暮らしていたのだのに、口実を作っていつまでもお応じにならないのも無情なことですよ。親王というものは後援者次第で光りもし、光らなくも見えるものなのですよ。お上^{かみ}の御代^{みよ}ももう末になつていくと始終仰せになるのだからね。あなたはよく考えなければならぬ。普通の人の場合は定^{きま}つた夫人を持つていてさらに結婚することは困難なのですよ。それでもあの大臣がまじめ一方でないながら二人の夫人を持ち、双方を同じように愛していくことができているという実例もあるではありませんか。

ましてあなたはお上の思召しどおりの地位ができれば、幾人でも侍していいわけなのだから」

と、平生にまして長々御教訓をあそばすのを承つて、兵部卿の宮御自身も無関心では決しておいでにならない女性のことであつたから、それをしいてお拒^{こば}みになる理由もないのである。ただ権^{けん}家に媚^め君としてたいそうな扱いを受けることは、自由を失うことであろうと、その点がいやなように思われになるのであるが、母宮のお言葉どおりにこの大臣の反感を多く買つておくことは得策でないと、今になつては抵抗力も少なくおなりになつた。多情な御性質であるから、あの按^あ察^ぜ使^ち大納言の家の紅梅の姫君をもまだ断念してはおいでにならず、なお花紅^{もみじ}葉につけ好奇心の対象としてそこへも御消息はよこしておいでに

なるのである。

その年は事なしに終わった。女二の宮の喪期も終わったのであるから、帝はもうおはばかりあそばすことはなくなった。

「御懇望にさえなればすぐにお許しになりたい思召しとうかがわれま
す」

こんなふうに薫へ告げに来る人々もあるためあまりに知らず顔に冷淡なものも無礼なことであると、しいて心を引き立てて、女二の宮付きの人を通して、求婚者としての手紙をおりおり送ることもするようになったが、取り合われぬ態度などはもとよりお示しになるはずもない。

帝は何月ごろと結婚の期を思召すというようなことも人から聞き、自身でも御許容あそばすこととはうかがわれるのであったが、心の中では

今も死んだ宇治の人ばかりが恋しく思われて、この悲しみを忘れ尽く
せる日があるうとは思われぬために、こうまで心のつながれる因縁の
あつたあの人と、ついに夫婦とはならずになつたのはどうしたこと
なのであらうとそれを怪しがっていた。身分がどれほど低くとも、あ
の人に少しでも似たところのある人であれば自分は妻として愛するで
あらう、反魂香はんごんこうの煙が描いたという影像だけでも見る方法はないかと
こんなことばかりが薫には思われて、女二にの宮みやとの結婚の成立を待つ
心もないのである。

左大臣のほうでは六の君の結婚の用意にかかつて、八月ごろにと宮
へその期を申し上げた。これを二条の院の中の君も聞いた。やはりそ
うであつた、自分などという何のよい背景も持たない女には必ず幸福

の破綻^{はたん}があるであろうと思いつつ、今日まで来たのである。多情な御性質とはかねて聞いていて、頼みにならぬ方とは思いますが、いっしょにいては恨めしく思うようなことも宮はしてお見せにならず、深い愛の変わる世もないような約束ばかりをあそばした。それがにわかには権家の娘の良人^{おとと}になつておしまいになつたなら、どうして静められる自分の心であろう、並み並みの身分の男のように、まったく自分から離れておしまいになることはあるまいが、どんなに悩ましい思いを多くせねばならぬことであろう、自分はどうしても薄命な生まれなのであるから、しまいにはまた宇治の山里へ帰ることになるのである。うと考えられるにつけても、出て来たままになるよりも再び帰ることは宇治の里人にも譏^{そし}らわしいことであるに違いない、返す返すも父宮

の御遺言にそむいて結婚をし、山莊を出て来た自分の誤りが恥ずかしい、しかさせた運命が恨めしいと中の君は思うのであった。姉君はおようで、柔らかいふうなところばかりが外に見えたが、精神は確しかとしておいでになった。中納言が今も忘れがたいように姉君の死を悲しみ続けているが、もし生きていたら、今の自分のような物思いをすることがあつたかもしれぬ、そうした未来をよく察して、あの人の妻になろうとされなかった、いろいろに身をかゝすようにして中納言の恋からのがれ続けていて、しまいには尼になろうとしたではないか、命が助かつて**必ず**仏弟子ぶつでしになつていたに違いない、今思つてみればきわめて深い思慮のある方であつた、父宮も姉君も自分をこの上もない、軽率な女であるとあの世から見ておいでになるであらうと、恥ず

かしく悲しく思うのであつたが、何も言うまい、言つても効かいのないことを言つて嫉妬しつとがましい心を見られる必要もないと中の君は思い返して、宮の新しい御縁組みのことは耳にはいつてこぬふうで過ごしてゐた。

宮はこの話のきまつてからは、平生よりもまた多く愛情をお示しになり、なつかしいふうに将来のことをどの日もどの日もお話しになり、この世だけでない永久の夫婦の愛をお約しになるのであつた。中の君はこの五月ごろから普通でない身体からだの悩ましさを覚えていた。非常に苦しがるようなことはないが、食欲が減退して、毎日横にばかりなつていた。妊婦というものを近く見る御経験のなかつた宮は、ただ暑いころであるからこんなふうになつているのであると思召した

が、さすがに不審に思召すこともあつて、

「ひよつとすればあなたに子ができるようになつたのではないだろうか。妊婦というものはそんなふうに苦しがるものだそうだから」

ともお言いになつたが、中の君は恥ずかしくて、そうでないふうばかりを作っているのを、進み出て申し上げる人もないため、確かには宮もおわかりにならなかつた。

八月になると、左大臣の姫君の所へ宮がはじめておいでになるのは幾日ということが外から中の君へ聞こえてきた。宮は隔て心をお持ちになるのではないが、お言いだしになることは気の毒でかわいそうに思われておできにならないのを、夫人はそれをさえ恨めしく思つていた。隠れて行なわれることでなく、世間じゅうで知つていることをい

つごろとだけもお言いにならぬのであるから、中の君の恨めしくなるのは道理である。この夫人が二条の院へ来てからは、特別な御用事な
どがないかぎりは御所へお行きになつても、ほかへおまわりになり、
泊まつてお帰りになるようなことを宮はあそばさないものであつて、情
人の所をお訪ねたずになつて孤閨こけいを夫人にお守らせになることもなかつた
のが、にわかにならな一方で結婚生活をするようになればどんな気がするで
あらうと、お心苦しくお思われになるため、今から習慣を少しつけさ
せようとされて、時々御所で宿直とくいなどをあそばされたりするのを、夫
人にはそれも皆恨めしいほうにばかり解釈されたに違いない。中納言
もかわいそうなことであると、この問題における中の君を思つてい
て、宮は浮気うわきな御性質なのであるから、愛してはおいでになつても、

はなやかな新しい夫人のほうへお心が多く引かれることになるであろう、婚家もまた勢いをたのんでいる所であるから、間断なしに婿君をお引き留めしようとする事になれば、今までとは違った変わり方の中に君は待ち続ける夜を重ねることになっては哀れであるなどと、こんなことが思われるにつけても、なんたることであろう、不都合なのは自分である、何のためにあの人を宮へお譲りしたのであろう、死んだ姫君に恋を覚えてからは、宗教的に澄み切った心も不透明なものになり、盲目的になり、あらゆる情熱を集めてあの人を思いながらも、同意を得ずに男性の力で勝つことは本意でないとはばかって、ただ少しでもあの人に愛されて相思う恋の成立をば夢見て未来の楽しい空想ばかりを自分はしていたのに、あの方は恋を感じぬふうを見せ続け、

さすがに冷淡には自分を見ていない証^{あかし}として、同じ身だと思えと言つて中の君との結婚を勧めたのであつたが、自分にとってはただあの人の態度がくやしく恨めしかつたところから、あの人の計画をこわして宮と中の君との結婚を行なわせてしまえばなどと、無理な道をとつて狂氣じみた媒介者になつた時のことを思い出すと、不都合なのは自分であつたと返す返す薫は悔やまれた。宮もどんな御事情になつていても、あの時のことをお思い出しになれば自分に対してでも少し御遠慮があつていいはずであると思うのであつたが、また宮はそんな方ではない、あれ以来あの時のことを話題にされるようなことはないではないか、多情な人というものは、異性にだけでなく、友情においても誠意の少ないものらしいなどとお憎みする心さえ薫に起こつた。自身が

あまりに純一な心から他人をもどかしく思うのであるらしい。あの人を死なせてからの自分の心は帝の御娘を賜わるということになったのもうれしいこととは思われない、中の君を妻に得られていたならと思う心が月日にそえ勝ってくるのも、ただあの人の妹であるということが原因^{もと}になつていてその思いが捨てられないのである、姉妹きょうだいといううちにもあの二人の女性の持ち合っていた愛は限度もないものであつて、臨終に近づいたころにも、残しておく妹を自分と同じものに思えと言ひ、ほかに心残りはないが、自分がこうなれと願つたあの縁組みをはずされたこと、他へ譲られたことで安心ができず、その成り行きを見るためにだけ生きていたい気がするとあの人が言つたのであつたから、あの世で宮の新しい御結婚のことなどを知つては、いっそう自

分を恨めしく思うことであろうなどと、切実に寂しいひとり寝をする夜ごとに薫^{かおる}は、風の音にも目のさめてこんなことが思われ、過去と未来を思い、この世を味気なくばかり思った。かりそめの情で愛人とし、女房として家に置いてある人たちの中には、自然と真実の愛も生じてきそうな人もあるはずであるが、事実としてはそんな人もない。いつも独身者の心持ちよりほかを知らなかった。そうした女房勤めしている中には、宇治の姫君たちにも劣らぬ階級の人も、時世の移りで不幸な身の上になり、心細く暮らしていたりしたのを、同情して家へ呼んだというような種類の女房が少なくはないのであるが、異性との交渉はそれほどにとどめて、出家の目的の達せられる時に、取り立ててこの人が心にかかると思われるような愛着の覚えられる人は作らないで

おこうと深く思っていた自分であつたにもかかわらず、今では死んだ恋人のゆかりの中の君に多く心の惹かれてゐる自分が認められる、人並みな恋でない恋に苦しむとは自分のことながらも残念であるなどという思いにとらわれていて、そのまま眠りえずに明かしてしまつた暁、立つ霧を隔てて草花の姿のいろいろと美しく見える中にはかない朝顔の混じっているのが特に目にとまる気がした。人生の頼みなさにたとえられた花であるから身に沁しんで薫は見られたのであろう。宵よいのまま揚げ戸も上げたままにして縁の近い所でうたた寝のようにして横たわり朝になつたのであつたから、この花の咲いていくところもただ一人薫がながめていたのであつた。侍を呼んで、

「北の院へ伺おうと思うから、簡単な車を出させるように」

と命じてから装束を改めた。

出かけるために庭へおりて、秋の花の中に混じって立った薫は、わざわざ艶えんなふうを見せようとするのではないが、不思議なまで艶で、高貴な品が備わり、氣どった風流男などとは比べられぬ美しさがあった。朝顔を手もとへ引き寄せるとはなはだしく露がこぼれた。

「今朝けさのまの色にや愛めでん置く露の消えぬにかかる花と見る見る

はかない」

などと独言ひとりごとをしながら薫は折って手にした。女郎花おみなえしには触れないで。

明け放れるのにしたがって霧の濃くなつた空の艶な気のする下を二条の院へ向かつた薫は、宮のお留守るすの日はだれもゆるりと寝ていることであろう、格子や妻戸をたたいて案内を乞こうのも物馴なれぬ男に思われるであろう、あまり早朝に来すぎたと思いながら薫は従者を呼んで、中門のあいた口から中をのぞかせてみると、

「お格子が皆上がっているようでございます。そして女房たちの何かいたしますけはい気配けはいがいたします」

と言う。下車して霧の中を美しく薫の歩いてはいつて来るのを女房たちは知り、宮がお微しのび場所からお帰りになつたのかと思つていたが、露に湿つた空気が薫の持つ特殊のにおいを運んできたためにだれであるかを悟り、

「やはり特別な方ですね。ただあまりに澄んだふうでいらつしやるのが物足りないだけね」

とも若い女房はささやいていた。

驚いたふうも現わさず、感じのよいほどにその人たちが衣擦きぬずれの音を立てて褥しとねを出したりする様子も品よく思われた。

「ここにすわってもよいとお許しくださいます点は名誉に思われますが、しかしこうした御簾みすの前の遠々しいおもてなしを受けることで悲観されて、たびたびは伺えないのです」

と薫が言うと、

「それではどういたせばお氣が済むのでございますか」

女房はこう答えた。

「北側のお座敷というような、隠れた室が私などという古なじみのゆりときさせていただくによい所です。しかしそれも奥様の思召しによることですから、不平は申し上げません」

と言い、薫は縁側から一段高い長押なげしに上半身を寄せかけるようにして坐ざしているのを見て、例の女房たちが、

「ほんの少しあちらへおいであそばせ」

などと言い、夫人を促していた。

もともと様子のおとなしい、男の荒さなどは持たぬ薫であるが、いよいよしんみり静かなふうになっていたから、中の君はこの人と対談することの恥ずかしく思われたことも、時がもはや薄らがせてなしく思うようになっていた。

「お身体からだが悪いと伺っていますのはどんなふうの御病気ですか」

などと薫は聞くが、夫人からはかばかしい返辞を得ることはできない。平生よりもめいっただふうの見えるのに理由のあることを知っている薫は、それを哀れに見て、こまやかに世の中に処していく心の覚悟というようなものを、兄弟などがあつて、教えもし慰めもするふうに言うのであつた。声なども特によく似たものともその当時は思わなかつたのであるが、怪しいほど薫には昔の人のとおりに聞こえる中の君の声であつた。人目に見苦しくなければ、御簾みすも引き上げて差し向かいになつて話したい、病氣をしているという顔が見たい心のいっぱいになるのにも、人間は生きている間次から次へ物思ひの続くものであるといふことはこれである、自分はまたこうした心の悶もだえをしてい

かねばならぬ身になったと薫はみずから悟った。

「はなやかなこの世の存在ではなくとも、心に物思いをして歎きにわが身をもてあますような人にはならず、一生を過ごしたいと願っていた私ですが、自身の心から悲しみも見ることになり、愚かしい後悔もこもごも覚えることになりましたのは残念です。官位の昇進が思うようにならぬということを人は最も大きな歎きとしていますが、それよりも私のする歎きのほうが少し罪の深さはまさるだろうと思われま
す」

などと言いながら、薫は持って来た花を扇に載せて見ていたが、そのうちに白い朝顔は赤みを帯びてきて、それがまた美しい色に見られるために、御簾の中へ静かにそれを差し入れて、

よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花

と言った。わざとらしくてこの人が携えて来たのでもないのに、よく露も落とさずにもたらされたものであると思って、中の君がながめ入っているうちに見る見る萎^{しぼ}んでいく。

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる

『何にかかれる』（露のいのちぞ）」

と低い声で言い、それに続けては何も言わず、遠慮深く口をつぐんでしまう中の君のこんなところも故人によく似ていると思うと、薫は

まずそれが悲しかった。

「秋はまたいつそう私を憂鬱^{ゆううつ}にします。慰むかと思ひまして先日宇治へ行つて来たのです。庭も籬^{まがき}も實際荒れていましたから、（里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋ののらなる）堪えがたい気持ちを感じました。私の父の院がお亡^{かく}れになつたあとで、晩年出家をされ籠^{こも}つておいでになつた嵯峨^{さが}の院もまた六条院ものぞいて見る者は皆おさえきれず泣かされたものです。木や草の色からも、水の流れからも悲しみは誘われて、皆涙にくれて帰るのが常でした。院の御身边におられたのは平凡な素質の人もなく皆りっぱな方がたでしたがそれぞれ別な所へ別れて行き、世の中とは隔離した生活を志されたものです、またそうたいした身の上でない女房らは悲しみにおぼれきつて、もう

どうなつてもいいというように山の中へはいったり、つまらぬ田舎のいなか人になつたりちりぢりに皆なつてしまいました。そうして故人の家を事実上荒らし果てたあとで、左大臣がまた来て住まれるようになり、宮がたもそれぞれ別れて六条院をお使いになることになつて、ただ今ではまた昔の六条院が再現された形になりました。あれほど大きな悲しみに逢あつたあとでも年月が経ふればあきらめというものが出てくるものなのであらう、悲しみにも時が限りを示すものであると私はその時見ました。こう私は言つていまして昔の悲しみは少年時代のことでしたから、悲痛としていても悲痛がそれほど身にしまなかつたのかもしれません。近く見ました悲しみの夢は、まだそれからさめることもどうすることもできません。どちらも死別によつての感傷には違いあ

りませんが、親の死よりも罪深い恋人関係の人の死のほうに苦痛を多く覚えていますのさえみずから情けないことだと思っています」

こう言つて泣く薫に、にじみ出すほどの情の深さが見えた。大姫君を知らず、愛していなかった人でも、この薫の悲しみにくれた様子を見ては涙のわかないはずもないと思われるのに、まして中の君自身もこのごろの苦い物思いに心細くなつていて、今まで以上にも姉君のことが恋しく思い出されているのであつたから、薫の憂いを見てはいつそうその思いがつのつて、ものを言われなほになり、泣くのをおさえきれずになっているのを薫はまた知つて、双方で哀れに思い合つた。

「世の憂^うきよりは（山里はものの寂しきことこそあれ世の憂きよりは

住みよかりけり」と昔の人の言いましたようにも私はまだ比べて考えることもなくて京に来て住んでおりましたが、このごろになりましたやはり山里へはいつて静かな生活をしたいということがしきりに思われるのでございます。でも思ってもすぐに実行のできませんことで弁の尼をうらやましくばかり思っております。今月の二十幾日はあすこの山の御寺の鐘を聞いて黙禱もくとうをしたい気がしてならないのですが、あなたの御好意でそつと山莊へ私の行けるようにしていただけませんでしょうかと、この御相談を申し上げたく私は思っております」

と中の君は言った。

「宇治をどんなに恋しくお思いになりましたでもそれは無理でしょう。あの道を辛抱しんぼうして簡単に御婦人が行けるものですか。男でさえ往来す

るのが恐ろしい道ですからね、私なども思いながらあちらへまいることが延び延びになりがちなのです。宮様の御忌日のことはあの阿闍梨あじやりに万事皆頼んできました。山莊のほうは私の希望を申せば仏様だけのものにしていただきたいのですよ。時々行つては痛い悲しみに襲われる所ですから、罪障消滅のできますような寺にしたいと私は思うのですが、あなたはどうか考えになりますか。あなたの御意見によつてどうとも決めたいと思うのですから、ああしたいとか、そうしてもいいとか腹藏なくおっしゃってください。何事にもあなたのお心持ちをそのまま行なわせていただければそれで私は満足なのです」

と言ひ、まじめな話を薫かおるはした。経卷や仏像の供養などもこの人はまた宇治で行なおうとしているらしい。中の君が父宮の御忌日に託し

て宇治へ行き、そのまま引きこもうとするのに賛同を求めるふうであるのを知って、

「宇治へ引きこもうというようなお考えをお出しになつてはいけませんよ。どんなことがあつても寛大な心になつて見ていらつしやい」などとも忠告した。

日が高く上つてきて伺候者が集まつて来た様子であつたから、あまり長居をするのも秘密なことのありそうに誤解を受けることであろうから帰ろうと薰はして、

「どこへまいっても御簾みすの外へお置かれするような経験を持たないものですから恥ずかしくなります。またそのうち伺いましょう」

こう挨拶あいさつをして行つたが、宮は御自身の留守の時を選んでなぜ来た

のであらうとお疑いをお持ちになるような方であるからと薫は思い、

それを避けるために侍所さむらいどころの長になつてゐる右京大夫うきようだゆうを呼んで、

「昨夜宮様が御所からお出になつたと聞いて伺つたのですが、まだ御
歸邸になつておられないので失望をしました。御所へまいつてお目に
かかつたらいいでしょうか」

と言つた。

「今日はお歸りでございました」

「ではまた夕方にでも」

薫はそして二条の院を出た。中の君の物越しの気配けはいに触れるごと
に、なぜ大姫君の望んだことに自分はそむいて、思慮の足らぬ処置を
とつたのであらうと後悔ばかりの續いて起こるのを、なぜ自分はこう

まで一徹な心であろうと薫は反省もされた。この人はまだ精進を続けて仏勤めばかりを家ではしているのである。母宮はまだ若々しくたよりのない御性質ではあるが、薫のこうした生活を危険なものと御覧になつて、

「私はもういつまでも生きてはいないのでしょうから、私のいる間は幸福なふうでいてください。あなたが仏道へはいろいろとしても、私自身尼になつていながらとめることはできないのだけれど、この世に生きてゐる間の私はそれを寂しくも悲しくも思うことだろうから、結局罪を作ることになるだろうからね」

とお言いになるのが、薫にはもったいなくもお氣の毒にも思われ、母宮のおいでになる所では物思ひのないふうを装っていた。

左大臣家では東の御殿をみがくようにもして設備い婿君を迎えるのに遺憾なくとのえて兵部卿の宮をお待ちしているのであつたが、十六夜の月がだいぶ高くなるまでおいでにならぬため、非常にお氣が進まないらしいのであるから将来もどうなることかと不安を覚えながらも使いを出してみると、夕方に御所をお出になつて二条の院においになるというしらせがもたらされた。愛する人を持つておいでになるのであるからと不快に大臣は思ったが、今夜に済まさねば世間体も悪いと思ひ、息子の頭中將を使いとして次の歌をお贈りするのであつた。

大空の月だに宿るわが宿に待つ宵過ぎて見えぬ君かな

宮はこの日に新婚する自分を目前に見せたくない、あまりにそれは

おぼしめ

残酷であると思召して御所においでになったのであるが、手紙を中の君へおやりになった、その返事がどんなものであったのか、宮が深くお動かされになって、そつとまた二条の院へおはいりになったのである。

かれん

可憐な夫人を見て出かけるお気持ちにはならず、気の毒に思召す心からいろいろに将来の長い誓いをさせるのであるが、中の君の慰まな
い様子をお知りになり、誘うていっしょに月をながめておいでになる
時に使いの頭中将は二条の院へ着いたのである。夫人は今までも煩悶
はんもん
は多くしてきたが、外へは出して見せまいとおさえきつてきていて、
素知らぬふうを作っていたのであるから、今夜に何事があるかも聞か

ずおおようにしているのを哀れにお思いになる宮であつた。頭中將の來たのをお聞きになると、さすがに宮はあちらの人もかわいそうにお思われになり、お出かけになろうとして、

「すぐ歸つて來ます。一人で月を見てはいけませんよ。氣の張り切っていない時などには危険で心配だから」

とお言ひになり、きまりの悪いお気持ちで隠れた廊下から寢殿へお行きになつた。お後ろ姿を見送りながら中の君は枕もまくら浮き上がるほどの涙の流れるのをみずから恥じた。恨めしい宮に愛情を覚えるのは恥ずかしいことであるとしていたのに、いつかそのほうへ自分は引かれていって、恨みの起こるのもそれがさせるのであると悟つたのである。幼い日から母のない娘で、この世をお愛しにもならぬ父宮を唯一

の頼みにしてあの寂しい宇治の山莊に長くいたのであるが、いつとなくそれにも馴^なれ、徒然^{つれづれ}さは覚えながらも、今ほど身にしむ悲しいものとは山莊時代の自分は世の中を知らなかった。父宮と姉君に死に別れたあとでは片時も生きていられないように故人を恋しく悲しく思っていたが、命は失われずあつて、軽蔑^{けいべつ}した人たちが思つたよりも幸福そうな日が長く続くものとは思われなかったが、自分に対する宮の態度に御誠実さも見え、正妻としてお扱いになるのによつて、ようやく物思いも薄らいできていたのであるが、今度の新しい御結婚^{うわさ}の噂が事実になつてくるにしたがい、過去にも知らなんだ苦しみに身を浸すこととなつた、もう宮と自分との間はこれで終わつたと思われる、人の死んだ場合とは違つて、どんなに新夫人をお愛しになるにもせよ、時々

はおいでになることがあろうと思つてよいはずであるが、今夜こうして寂しい自分を置いてお行きになるのを見た刹那せつなから、過去も未来も真暗まっくらなような気がして心細く、何を思うこともできない、自分ながらあまりに狭量であるのが情けない、生きていればまた悲観しているよ
うなことばかりでもあるまいなどと、みずから慰めようと中の君はするのであるが、姨捨山おばすてやまの月（わが心慰めかねつ更科さらしなや姨捨山に照る月を見て）ばかりが澄み昇のぼつて夜がふけるにしたがい煩悶はんもんは加わつていった。松風の音も荒かった山おろしに比べれば穏やかでよい住居すまいと
しているようには今夜は思われずに、山の椎しいの葉の音に劣つたように
中の君は思うのであつた。

山里の松の蔭かげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

過去の悲しい夢は忘れたのであろうか。

老いた女房などが、

「もうおはいりあそばせ、月を長く見ますことはよくないことだと申しますのに。それにこの節ではちょっとしましたお菓子すら召し上がらないのですから、こんなことでどうおなりになりますでしょう。よくございません。以前の悲しいことも私どもに思い出させになりますのは困ります。おはいりあそばせ」

こんなことを言う。若い女房らは情けない世の中であると歎息をして、

「宮様の新しい御結婚のこと、ほんとうにいやですね。けれどこの奥様をお捨てあそばすことにはならないでしょう。どんな新しい奥様をお持ちになっても、初めに深くお愛しになった方に対しては情けの残るものだと思いますからね」

などと言っているのも中の君の耳にはいつてくる。見苦しいことである、もうどんなことになっても何とも自分からは言うまい、知らぬふうでいようとこの人が思っているというのは、人には批評をさせまい、自身一人で宮をお恨みしようと思うのであるかもしれない。

「そうじゃありませんか、宮様に比べてあの中納言様の情のお深さ」
とも老いた女は言い、

「あの方の奥様になっておいでにならないで、こちらの奥様におなり

になつたというのも不可解な運命というものですね」

こんなこともささやき合つていたのである。

宮は中の君を心苦しく思召おぼしめしながらも、新しい人に興味を次々お持ちになる御性質なのであるから、先方に喜ばれるほどに美しく装つていきたいお心から、薫香くんこうを多くたきしめてお出かけになつた姿は、寸分の隙すきもない若い貴人でおありになつた。六条院の東御殿もまた華麗であつた。小柄な華奢きゃしゃな姫君というのではなく、よいほどな体格をした新婦であつたから、どんな人であろう、たいそうに美人がつた柔らかみのない、自尊心の強いような女ではなからうか、そんな妻であつたならいやになるであらうと、こんなことを最初はお思ひになつたのであるが、そうではないらしくお感じになつたのか愛をお持ちに

なることができた。秋の長夜ではあつたが、おそくおいでになつたせいでまもなく明けていった。

兵部卿の宮はお歸りになつてもすぐに西の対へおいでになれなかつた。しばらく御自身のお居間でお寝^{やす}みになつてから起きて新夫人の文^{ふみ}をお書きになつた。あの御様子ではお氣に入らないのでもなかつたらしいなどと女房たちは陰口^{かげぐち}をしていた。

「対の奥様がお氣の毒ですね。どんなに大きな愛を宮様が持つておいでになつても、自然氣^{けお}押されることも起こるでしょうからね」

ただの主従でない関係も宮との間に持つている人が多かったから、ここでも嫉妬^{しつと}の氣はかもされているのである。あちらからの返事をここで見てからと宮は思つておいでになつたのであるが、別れて明かし

たのもただの夜でないのであるから、どんなに寂しく思っていることであろうと、中の君がお氣にかかつてそのまま西の対へおいでになった。まだ夜のままだま繕われていない夫人の顔が非常に美しく心を惹ひくところがあつて、宮のおいでになったことを知りつつ寝たままでいるのも、反感をお招きすることであるからと思ひ、少し起き上がっている顔の赤みのさした色などが、今朝けさは特別にまたきれいに見えるのであつた。何のわけもなく宮は涙ぐんでおしまいになつて、しばらく見守つておいでになるのを、中の君は恥ずかしく思つて顔を伏せた。そうされてまた、髪かみの掛かりよう、はえようなどにたぐいもない美を宮はお感じになつた。きまりの悪さに愛の言葉などはちよつと口へ出ず、なにげないふうふうに紛らして、

「どうしてこんなに苦しそうにばかり見えるのだろう。暑さのせいだとあなたは言っていたからやっと思しくなつて、もういいころだと思つてゐるのに、晴れ晴れしくはないのはいけないことですね。いろいろ祈^{きと}禱などをさせていても効^{しる}験の見えない気がする。それでも祈禱はもう少し延ばすほうがいいね。効験をよく見せる僧がほしいものだ、何々僧都^{そうず}を夜居^{よい}にしてあなたにつけておくのだった」

というようなまじめらしい話をされるのにもお口じようずなのがうとましく思われる中の君でもあつたが、何もお返辞をしないのは平生に違つたことと思われるであらうとはばかり、

「私は昔もこんな時には普通の人のような祈禱も何もしていただかないで自然になおつたのですから」

と言った。

「それでよくなおっているのですか」

と宮はお笑いになつて、なつかしい愛嬌あいぎょうの備わった点はこれに比べうる人はないであろうと思ひになつたのであるが、お心の一方では新婦をなよく知りたいとあせるところのおありになるのは、並み並みならずあちらにも愛着を覚えておいでになるのであらう。しかしながらこの人と今いっしょにおいでになつては、昨日きのうの愛が減じたとは少しもお感じにならぬのか、未来の世界までもお言いだしになつて、変わらない誓いをお立てになるのを聞いていて、中の君は、

「仏の教えのようにこの世は短いものに違いありません。しかもその終わりを待ちますうちにも、あなたが恨めしいことをなさいますのを

見なければなりませんから、それよりも未来の世のお約束のほうをお信じていていいかもしれないと思うことで、まだ懲りずにあなたのお言葉に信頼しようと思います」

と言い、もう忍びきれなかったのか今日は泣いた。今日までもこんなふうに思っているとはお見せすまいとして自身で紛らわしておさえてきた感情だったのであるが、いろいろと胸の中に重なってきて隠されぬことになり、こぼれ始めた涙はとめようもなく多く流れるのを、恥ずかしく苦しく思つて、顔をすっかり向こうに向けているのを、そして宮はこちらへお引き向けになつて、

「二人がいつしよに暮らして、同じように愛しているのだと思つていたのに、あなたのほうにはまだ隔てがあつたのですね。それでなければ

ば昨夜のうちに心が変わったのですか」

こうお言いになり宮は御自身の袖で夫人の涙をおぬぐいになると、

「夜の間の心変わりということからあなたのお気持ちがよく察せられます」

中の君は言つて微笑を見せた。

「ねえ、どうしたのですか、ねえ、なんという幼稚なことをあなたは言いだすのですか。けれどもあなたはほんとうは私へ隔てを持っていないから、心に浮かんただけのことでもすぐ言ってみるのですね。だから安心だ。どんなにじょうずな言い方をしようとも私が別な妻を一人持ったことは事実なのだから私も隠そうとはしない。けれど私を恨むのはあまりにも世間というものを知らないからですよ。可憐だが

困ったことだ。まああなたが私の身になって考えてごらんなさい。自身を自身の心のままにできないように私はなっているのですよ。もし光明の世が私の前に開けてくればだれよりもあなたを愛していた証明をしてみせることが一つあるのです。これは軽々しく口にすべきことではないから、ただ命が長くさえあればと思っていてください」

などと言っておいでになるうちに宮が六条院へお出しになった使いが、先方で勧められた酒に少し酔い過ぎて、しんしゃく斟酌すべきことも忘れ、平気でこの西の対の前の庭へ出て来た。美しいてんとう纏頭の衣類を肩に掛けごちようているので後朝の使いであることを人々は知った。いつの間にお手紙は書かれたのであろうと想像するのも快いことではないはずである。宮もしいてお隠しになろうと思召さないのであるが、涙ぐんでいる人

の心苦しさに、少し気をきかせばよいものと、ややにがにがしく使
いのことをお思いになったが、もう皆暴露してしまったのであるから
とお思いになり、女房に命じて返事の手紙をお受け取らせになった。

できるならば朗らかにしていま一人の妻のあることを認めさせてしま
おうと思召して、手紙をおあけになると、それは継母ままははの宮のお手に
なったものだったから、少し安心をあそばして、そのままそこへ
お置きになった。他の人の書いたものにもせよ、宮としてはお気のひ
けることであつたに違いない。

私などが出すぎたお返事をいたしますことは、失礼だと思いまし
て、書きますことを勧めるのですが、悩ましそうにばかりいたして
おりますから、

をみなへししを萎れぞ見ゆる朝露のいかに置きける名残なごりなるらん

貴女きじよらしく美しく書かれてあつた。

「恨みがましいことを言われるのも迷惑だ。ほんとうは私はまだ当分
気楽にあなたとだけ暮らして行きたかつたのだけれど」

などと宮は言っておいでになつたが、一夫一婦であるのを原則とし
正當とも見られている普通の人の間にあつては、良人おとこが新しい結婚を
した場合に、その前からの妻をだれも憐あわれむことになつてゐるが、高い
貴族をその道徳で縛ろうとはだれもしない。いずれはそうなるべきで
あつたのである。宮たちと申し上げる中でも、輝く未来を約されてお
いでになるような兵部卿ひょうぶきやうの宮であつたから、幾人でも妻はお持ちに

なつていいのであると世間は見ているから、格別二条の院の夫人が気の毒であるとも思わぬらしい。こんなふう^にに夫人としての待遇を受けて、深く愛されている中の君を幸福な人であるとさえ言っているのである。

中の君自身もあまりに水も洩^もらさぬ夫婦生活に慣らされてきて、にわか^にに軽く扱われることが歎かわしいのであらうと見えた。こんなに二人と一人というような関係になつた場合は、どうして女はそんなに苦悶^{くもん}をするのであらうと昔の小説を読んでも思い、他人のことでも腑^ふに落ちぬ気がしたのであるが、わが身の上になれば心の痛いものである、苦しいものであると、今になつて中の君は知るようになった。宮は前よりもいっそう親しい良人ぶりをお見せになつて、

「何も食べぬということは非常によろしくない」

などとお言いになり、良製の菓子をお取り寄せになりまた特に命じて調製をさせたりもあそばして夫人へお勧めになるのであったが、中の君の指はそれに触れることのないのを御覧になつて、

「困ったことだね」

と宮は歎息をしておいでになつたが、日暮れになつたので寢殿のほうへおいでになつた。涼しい風が吹き立って、空の趣のおもしろい夕べである。はなやかな趣味を持つておいでになつたから、こんな場合にはまして美しく御風采ふうさいをお作りになり出てお行きになる宮を知つていて、物哀れな夫人の心には忍び余る愁うれいの生じるのも無理でない。

ひぐらし
蛸ひぐらしの声を聞いても宇治の山陰の家ばかりが恋しくて、

おほかたに聞かましものを鯛の声うらめしき秋の暮れかな

と独言^{ひとりごと}たれた。今夜はそう更^ふかさずに宮はお出かけになった。前駆の人払いの声の遠くなるとともに涙は海人^{あま}も釣り糸を垂^たれんばかりに流れるのを、われながらあさましいことであると思いつつ中の君は寝ていた。結婚の初めから連続的に物思いをばかりおさせになった宮で
あると、その時、あの時を思うと、しまいにはうとましくさえ思われた。身体^{からだ}の苦しい原因をなしている妊娠も無事に産が済まされるかどうかかわからない、短命な一族なのであるから、その場合に死ぬのかも
しれないなどと思つていくと、命は惜しく思われぬが、また悲しいことであるとも中の君は思った。またそうした場合に死ぬのは罪の深い

ことなのであるからなどと眠れぬままに思い明かした。

ちゅうぐう

次の日は中宮が御病氣におなりになったといふので、皆御所へま

ごふうき

いったのであるが、少しの御風氣で御心配申し上げることもないとわ

かった左大臣は、昼のうちに退出した。源中納言を誘って同車して自

ろけん

邸へ向かったのである。この日が三日の露見の式の行なわれる夜に

なっていた。どんなにしても華麗に大臣は式を行なおうとしているの

であろうが、こんな時のことは来賓に限りがあつて、派手^{はで}にしようも

かおる

なからうと思われた。薫をそうした席へ連ならせるのはあまりに高貴

なふうがあつて心恥ずかしく大臣には思われるのであるが、婿君と親

むすこ

密な交情を持つ人は自分の息子たちにもないのであつたし、また一家

の人として他へ見せるのに誇りも感じられる薫であつたから伴つて

行ったらしい。平生にも似ず兄とともに忙しい気持ちで六条院へは
いって、六の君を他人の妻にさせたことを残念に思うふうもなく、何
かと式の用を兄のために手つだつてくれるのを、大臣は少し物足らぬ
ことに思いもした。

八時少し過ぐるころに宮はおいでになった。寢殿の南の間の東に寄
せて婿君のお席ができていた。高脚たかあしの膳ぜんが八つ、それに載せた皿は皆
きれいで、ほかにまた小さい膳が二つ、飾り脚のついた台に載せたお
料理の皿など、見る目にも美しく並べられて、儀式の餅もちも供えられて
ある。こんなありふれたことを書いておくのがはばかられる。

大臣が新夫婦の居間のほうへ行つて、もう夜がふけてしまったから
と女房に言い、宮の御出座を促すのであったが、宮は六の君からお離

れになりがたいふうで渋っておいでになった。今夜の来賓としては雲くも井いの雁夫人かりの兄弟である左衛門督さえもんのかみ、藤宰相とうさいしやうなどだけが外から来ていた。やつとしてから出ておいでになった宮のお姿は美しくごりつぽであつた。主人がたの頭中とうちゆう将が盃さかずきを御前へ奉り、膳部を進めた。宮は次々に差し上げる盃を二つ三つお重ねになった。薫が御前のお世話をみきして御酒をお勧めしている時に、宮は少し微笑をお洩もらしになった。

以前にこの縁組みの話をあそばして、堅苦しく儀礼ばることの好きな家の娘の婿になることなどは自分に不似合いなことではいである。薫へお言いになったのを思い出しておいでになるのである。中納言ちゆうなごんのほうでは何も覚えていぬふうで、あくまで殷勤いんぎんにしていた。そしてまたこの人は東の対の座敷のほうに設けたお供の役人たちの酒席へま

で顔を出して接待をした。はなやかな殿上役人も多かった四位の六人へは女の装束に細長、十人の五位へは三重襲がさねの唐衣からぎぬ、裳もの腰の模様も四位のとは等差があるもの、六位四人は綾あやの細長、袴はかまなどが出された纏頭てんとうであつた。この場合の贈り物なども法令に定められていてそれを越えたことはできないのであつたから、品質や加工を精選してそろえてあつた。召次侍めしつぎさむらい、舍人とねりなどにもまた過分なものが与えられたのである。こうした派手はでな式事は目にもまばゆいものであるから、小説などにもまず書かれるのはそれであるが、自分に語った人はいちいち数えておくことができなかったそうであつた。

源中納言の従者の中に、あまり重用ちやうようされない男かもしれぬが、暗い紛れに庭の中へはいつて、それらの行なわれるのを見て来て、歎息たんそくを

洩^もらし、

「うちの殿様はなぜいざこざをお言いにならないでこちらの殿様の婿におなりにならなかつたろう、つまらぬ御独身生活だ」

と中門の所でつぶやいているのが耳にはいつて中納言はおかしく思った。自身たちは夜ふけまで待たされていて、ただつまらぬ眠さを覚えさせられているだけであるのと、婿君の従者が美酒に酔わされて快くどこかの座敷で身を横たえているらしく思われるのを比較してみてうらやましかつたのであろう。

薫は家に入り寝室で横になりながら、新しい婿として式に臨むことはきまりの悪そうなことである、たいそうな恰好かつこうをした舅しゅうとが席しやくに出ていて、平生からなじみのある仲にもかかわらず燭ひをあかあかともして

勧める盃などを宮は落ち着いて受けておいでになったのはごりっぱなものであつたなどと思い出していた。それは実際自分でもすぐれた娘というようなものを持っていれば、この宮以外には御所へでもお上げする気にはなれなかつたであらうと思われた薫は、どこの家でもにおうみや勾宮へ奉ろうとして志を得なかつた人はまだ源中納言という同じほどんな候補者があると、何にも自分が宮にお並べして言われるのは世間の受けが決して悪くない自分とせねばならないなどと思ひ上がりもされた。内親王を賜わるといふ帝の思召おぼしめしなるものが真実であれば、こんなふうに気の進まぬ自分はどうすればいいのであらう、名誉なことにもせよ、自分としてありがたく思われない、女二にょにの宮が死んだ恋人によく似ておいでになったならその時はうれしいであらうがとさすがに否定

をしきっているのでもない中納言であつた。例のような目のさめがち
な独り寝ひとのつれづれさを思つて按察使あぜちの君と言つて、他の愛人よりは
やや深い愛を感じている女房の部屋へやへ行つてその夜は明かした。朝に
なりきればとて人が奇怪がることでもないのであるが、そんなことも
気にするらしく急いで起きた薫を、女は恨めしく思つたに違いない。

うち渡し世に許しなき関川をみなれそめけん名こそ惜しけれ

と按察使は言つた。哀れに思われて、

深からず上は見ゆれど関川のしもの通ひは絶ゆるものかは

薫はこう言った。恋の心は深いと言われてさえ頼みにならぬものであるのに、上は浅いと認めて言われるのに女は苦痛を覚えなかったはずはない。妻戸を薫はあけて、

「この夜明けの空のよさを思つて早く出て見たかったのだ。こんな深い趣を味わおうとしない人の気が知れないね、風流がる男ではないが、夜長を苦しんで明かしたのちの秋の黎明^{れいめい}は、この世から未来の世のことまでが思われて身にしむものだ」

こんなことを紛らして言いながら薫は出て行つた。女を喜ばそうとして上手^{じょうず}なことを多く言わないのであるが、艶^{えん}な高雅な風采^{ふうさい}を備えた人であるために、冷酷であるなどとはどの相手も思つていないのであつた。仮なように作られた初めの関係を、そのままにしたくなく

て、せめて近くにいて顔だけでも見ることができればというような考
えを持つのか、尼になっておいでになる所にもかかわらず、縁故を捜
してこの宮へ女房勤めに出ている人々はそれぞれ身にしむ思いをする
ものらしく見えた。

兵部卿の宮は式のあつたのちの日に新夫人を昼間御覧になることに
よつて、いっそう深い愛をお覚えになつた。中くらいな背丈で、全体
から受ける感じが清らかな人である。頬にかかつた髪、頭つきはその
中でも目だつて美しい。皮膚があまりにも白いにおわしい色をした誇
らかな氣高い顔の眸つきはきわめて貴女らしくて、何の欠点もない美
人というほかはない。二十一、二であつた。少女ではないから完成さ
れぬところもなく、妍麗なる盛りの花と見えた。大事に育てられてき

た価値は十分に受けとれた。親の愛でこれを見れば、目もくらむ美女
と思われるに違いない。ただ柔らかで愛嬌あいきようがあつて、可憐かれんな点は中の
君のよさがお思われになる宮であつた。話をされた時にする返辞へんじも羞は
じらつてはいるが、またたよりない氣を覚えさせもしない。確かな価
値の備わつた才女らしい姫君であつた。きれいな若い女房が三十人ほ
ど、童女六人が姫君付きで、そうした人の服装なども、きらきらしい
ものは飽くほど見ておいでになる兵部卿ひょうぶきやうの宮だと思い、不思議なほど
目だたぬふうに作らせてあつた。三条の夫人が生んだ長女を東宮へ
奉った時よりも今度の婿迎えを大事に夕霧の大臣は準備したというの
も、宮の御声望の高さがさせたことであらう。

それからのちの宮は二条の院へ気安くおいでになることもおできに

ならなかった。軽い御身分でなかったから、昼間をそちらへ行っておいでになるということもむずかしくて、六条院の中の南の御殿に以前ずっとおいでになったようにしてお住みになり、日が暮れると東御殿を余所^{よそ}にしてお出かけになることもおできになれなかったりして、宮が幾日もおいでにならぬことのあるため、こうなることであろうとは思ったが、すぐにも露骨に冷淡なお扱いを受けることになったではないか、賢い人であれば自分の無価値さをよく知って京へまでは出て来なかったはずであつたと、今になつては返す返す宇治を離れて来たことが正気をもつてしたこととは思えなくて悲しい中の君は、やはりどうともして宇治へ行くことにしたい、ここを捨てて行くふうではなくて、あちらでしばらくでも心を休めたい、反抗的に行なえば人聞きも

悪いであろうが、それならばいいはずである、とこの煩悶はんもんを一人で背負いきれぬように思い、恥ずかしくは思ったが源中納言に手紙を送った。

父君の仏事の日あじやりのことは阿闍梨から報告がございました。わしく知ることができました。あなたのように昔の名残なごりを思ってくださいます方がありませんでしたなら、どんなに故人はみじめであつたかと思われますにつけても御親切がうれしくばかり思われます。なおこのお礼はお目にかかれます時に自身で申し上げたいと思ひます。

という文ふみであつた。檀紙の上の字も見栄みえをかまわずまじめな書きぶりがしてあるのであるが、それもまた美しく思われた。八の宮の御忌日に僧を集めて法事を宇治で薫が行なつてくれたのに対する礼状なの

であつて、おおげさに謝意は述べてないが好意は深く認めているらしく思われた。平生はこちらから送る手紙の返事さえ気を置くふうに短くより書いて来ない人が、自身でまた口ずからお礼を申し上げたいと思うというようなことの書かれてあることのうれしさに薫の心はときめいた。宮がお得になつたはなやかな生活に心が多くお引かれになつて、二条の院へはよくもおいでにならないことについての中の君の煩悶^{もん}も見えるのが哀れで、恋愛なものではない手紙であるが、手から放たず何度となく薫は繰り返して読んでいた。返事は、

承りました。先日は僧のようなことを多く申して、昔のことばかりを歎いた私でしたが、それは追想にとらわれざるをえない時節だったからです。名残とお書きになりましたことで、私が故人の宮様に

お持ちする感情を少し浅く御覧になつていらつしやるのではないかと恨めしくなります。

何も皆近く参上してお話しいたしましょう。

と、きまじめな文章が、白い厚い色紙に書いて送られた。

かおる

薫は翌日の夕方に二条の院の中の君を訪ねた。たず中の君を恋しく思う

心の添った人であるから、わけもなく服装などが気になり、柔らかな

くんこう

衣服に、備わるが上の薫香をたきしめて来たのであつたから、あまり

ちようじ

にも高いにおいがあたりに散り、常に使っている丁字染めの扇が知ら

ず知らず立てる香などさえ美しい感じを覚えさせた。中の君も昔のあ

の夜のことか思い出されることもないのではなかったから、父宮と姉

君への愛の深さが認識されるにつけても、運命が姉の意志のままに

なっていたのであつたらと心の動揺を覚えたかもしれない。少女ではないのであるから、恨めしい方の心と比べてみて、何につけてもりっぱな薫がわかつたのか、平生あまりに遠々しくもてなしていて気の毒であつた、人情にうとい女だとこの人が思うかもしれない、今日は前の室の御簾みすの中へ入れて、自身は中央の室の御簾に几帳きちようを添え、少し後ろへ身を引いた形で対談をしようとした。

「お招きくだすつたのではありませんが、来てもよろしいとのお許しが珍しくいただけましたお礼に、すぐにもまいりたかつたのですが、宮様が来ておいでになると承つたものですから、御都合がお悪いかもしれぬと御遠慮を申して今日にいたしました。これは長い間の私の誠意がようやく認められてまいつたのでしうか。遠さの少し減つた御

簾の中へお席をいただくことにもなりました。珍しいですね」

と薫の言うのを聞いて、中の君はさすがにまた恥ずかしくなり、言葉が出ないように思うのであったが、

「この間の御親切なお計らいを聞きまして、感激いたしました心を、いつものようによく申し上げもいたしませんでは、どんなに私がありがたく存じておりますかしれませんような気持ちの一端をさえおわかりになりますまいと残念だったものですから」

と羞^はじらいながらできるだけ言葉を省いて言うのが絶え絶えほのかに薫へ聞こえた。

「たいへん遠いではありませんか。細かなお話もし、あなたからも承りたい昔のお話もあるのですから」

こう言われて中の君は道理に思い、少し身じろぎをして几帳のほうへ寄つて来たかすかな音にさえ、衝動を感じる薫であつたが、さりげなくいつそう冷静な様子を作りながら、宮の御誠意が案外浅いものであつたとお譏り^{そし}するようにも言い、また中の君を慰めるような話をも静々としていた。中の君としては宮をお恨めしく思う心などは表へ出してよいことではないのであるから、ただ人生を悲しく恨めしく思っているというふうに紛らして、言葉少なに憂鬱^{ゆううつ}なこのごろの心持ちを語り、宇治の山莊へ仮に移ることを薫の手で世話してほしいと頼む心らしく、その希望を告げていた。

「その問題だけは私の一存でお受け合いすることができかねます。宮様へ素直^{すなお}にお頼みになりました、あの方の御意見に従われるのがいい

と思いますがね、そうでなくば御感情を害することになって、軽率だ
とお怒りになったりしましては将来のためにもよくありません。それ
でなく穏やかに御同意をなされればあちらへのお送り迎えを私の手で
どんなにでも都合よく計らいますのにはばかりがあるものです。夫
人をお託しになっても危険のない私であることは宮様がよくご存じで
す」

こんなことを言いながらも、話の中に自分は過去にしそこねた結婚
について後悔する念に支配ばかりされていて、もう一度昔を今にする
工夫はないかということ^{くふう}を常に思うとほのめかして次第に暗くなって
いくころまで帰ろうとしない客に中の君は迷惑を覚えて、

「それではまた、私は身体^{からだ}の調子もごく悪いのでございますから、こ

んなふうでない時がございましたら、お話をよく伺わせていただきま
す」

と言い、引っ込んで行ってしまいそうになったのが残念に思われ
て、薫は、

「それにしてもいつごろ宇治へおいでになろうとお思いになるのです
か。伸びてひどくなっていました庭の草なども少しきれいにさせてお
きたいと思います」

と、機嫌きげんを取るために言うと、しばらく身を後ろへずらしていた中
の君がまた、

「もう今月はすぐ終わるでしょうから、来月の初めでもと思います。
それは忍んですればいいでしょう。皆の同意を得たりしますようなた

いそんなことにいたしませんでも」

と答えた。その声が非常に可憐かれんであつて、平生以上にも大姫君と似たこの人が薫の心に恋しくなり、次の言葉も口から出ずよりかかつていた柱の御簾の下から、静かに手を伸ばして夫人の袖そでをつかんだ。中の君はこんなことの起こりそうな予感がさつきから自分にあつて恐れていたのであると思うと、とがめる言葉も出すことができず、いつそう奥のほうへいざつて行こうとした時、持った袖について、親しい男女の間のように、薫は御簾から半身を内に入れて中の君に寄り添つて横になった。

「私が間違っていますか、忍んでするのがいいとお言いになったのうれしいことと取りましたのは聞きそこねだったのでしょいかと、そ

れをもう一度お聞きしようと思っただけです。他人らしくお取り扱いにならないでもよいはずですが、無情なふうをなさるではありませんか」

こう薫に恨まれても夫人は返辞をする気にもならないで、思わず憎みの心の起こるのをしいておさえながら、

「なんというお心でしょう、こんな方とは想像もできませんようなことをなさいます。人がどう思うでしょう、あさましい」

とたしなめて、泣かんばかりになっているのにも少し道理はあるとかわいそうに思われる薫が、

「これくらいのごことは道徳に触れたことでも何でもありませんよ。これほどにしてお話をした昔を思い出してください。亡くなられた女王^{によおう}

さんのお許しもあつた私が、近づいたからといって、奇怪なことのよ
うに見ていらつしやるのが恨めしい。好色漢がするような無礼な心を
持つ私でないと安心していらつしやい」

と言ひ、激情は見せずゆるやかなふうにして、もう幾月か後悔の日
ばかりが続き、苦しいまでになつていく恋の悩みを、初めからこまご
まと述べ続け、反省して去ろうとする様子も見せないため、中の君は
どうしてよいかもわからず、悲しいという言葉では全部が現わせない
ほど悲しんでいた。知らない他人よりもかえつて恥ずかしく、いとわ
しくて、泣き出したのを見て、薫は、

「どうしたのですか、あなたは、少女らしい」

こう非難をしながらも、非常に可憐かれんでいたいたしいふうのこの人

に、自身を衛^{まも}る隙^{すき}のないところと、豊かな貴女^{きじよ}らしさがあつて、あの昔見た夜よりもはるかに完成された美の覚えられることによって、自身^{みづか}のしたことであるが、これを他の人妻にさせ、苦しい煩悶^{はんもん}をするこ
ととなつたとくやしくなり、薫もまた泣かれるのであつた。夫人のそ
ばには二人ほどの女房が侍していたのであるが、知らぬ男^{ちんにゆう}の闖入した
のであれば、なんということをと申^{まを}つて中の君を助けに出るのであ
ろうが、この中納言のように親しい間柄の人がこの振舞^{ふるまい}をしたのであ
るから、何か訳のあることであらうと思う心から、近くにいることを
はばかつて、素知らぬ顔を作り、あちらへ行つてしまったのは夫人の
ために気の毒なことである。中納言は昔の後悔が立ちのぼる情炎とも
なつて、おさえがたいのであつたであらうが、夫人の処女時代にさ

え、どの男性もするような強制的な結合は遂げようとしなかった人であるから、ほしいままな行為はしなかった。こうしたことを細述することはむずかしいと見えて筆者へ話した人はよくも言ってくれなかった。

どんな時を費やしても効かいのないことであつて、そして人目に怪しまれるに違ちがひないことであると思つた薫は歸つて行くのであつた。まだ宵よいのような氣でいたのに、もう夜明けに近くなつていた。こんな時刻では見とがめる人があるかもしれぬと心配がされたというのも中の君の名誉を重んじてのことであつた。妊娠のために身体の調子を悪くしているという噂うわさも事実であつた。恥はずかしいことに思い、見られまいとしていた上着の腰の上の腹帯にいたましさを多く覚えて一つはあれ

以上の行為に出なかつたのである、例のことではあるが臆病なのは自分の心であると思われる薫であつたが、思いやりのないことをするのは自分の本意でない、一時の衝動にまかせてなすべからぬことをしてしまつては今後の心が静かでありえようはずもなく、人目を忍んで通つて行くのも苦勞の多いことであらうし、宮のことと、その新しいこととでもこもごもにあの人が煩悶をするであらうことが想像できるではないかなどとまた賢い反省はしてみても、それでおさえきれぬ恋の火ではなく、別れて出て来てすでにもう逢いたく恋しい心はどうしようもなかつた。どうしてもこの恋を成立させないでは生きておられないようにさえ思うのも、返す返すあやになく薫の心というべきである。昔より少し瘦^やせて、氣^け高^だく可^か憐^{れん}であつた中の君の面影が身に添つ

たままでいる気がして、ほかのことは少しも考えられない薫になつていた。宇治へ非常に行きたがつているようであつたが、宮がお許しになるはずもない、そうかといって忍んでそれを行なわせることはあの人のためにも、自分のためにも世の非難を多く受けることになつてよろしくない。どんなふうな計らいをすれば、世間体のよく、また自分の恋の遂げられることにもなるであろうと、そればかりを思つて虚^{うつろ}になつた心で、物思わしそうに薫は家に寝ていた。

まだ明けきらぬころに中の君の所へ薫の手紙が届いた。例のように外見はきまじめに大きく封じた立文^{たてぶみ}であつた。

いたづらに分けつる路^{みち}の露しげみ昔おぼゆる秋の空かな

冷ややかなおもてなしについて「ことわり知らぬつらさ」（身を知れば恨みぬものをなぞもかくことわり知らぬつらさなるらん）ばかりが申しようもなくつのるのです。

こんな内容である。返事を出さないのもいぶかしいことに人が見るであらうからと、それもつらく思われて、

承りました。非常に身体からだの苦しい日ですから、お返事は差し上げられませぬ。

と中の君は書いた。

これをあまりに短い手紙であると、物足らず寂しく思い、美しかった面影ばかりが恋しく思い出された。人妻になったせいかな、むやみに恐怖するふうは見せず、貴女らしい気品も多くなった姿で、闖入者を

柔らかになつかしいふうに説いて退却させた才気などが思い出されるときともに、ねたましくも、悲しくもいろいろにその人のことばかりが思われる薫は、自身ながらわびしく思った。落胆はする必要もない、宮の愛が薄くなってしまうえば、あの人は自分ばかりをたよりにするはずである、しかし公然とは夫婦になれず、世間のはばかられる二人であらうが、隠れた恋人としておいても、自分は他に愛する婦人を作るまい、生涯で唯一の妻とあの人を自分だけは思っていけるであらうなどと、二条の院の夫人のことばかりを思っているというのもけしからぬ心である。反省している時、またその人に清い恋として告白している時には賢い人になっているのであるが、この人すら情けない愛欲から離れられないのは男性の悲哀である。大姫君の死は取り返しのなら

ぬものであったが、その時には今ほど薫は心を乱していなかった。これは道義観さえ超えていろいろな未来の夢さえ描くものを心に持っていた。

この日は二条の院へ宮がおいでになったということを知り、中の君の保護者をもつて任ずる心はなくして、胸が嫉妬にとどろき、宮をおうらやましくばかり薫は思った。

宮は二、三日も六条院にばかりおいでになったのを、御自身の心ながらも恨めしく思召されてにわかにお帰りになったのである。もうこの運命は柔順に従うほかはない、恨んでいるとは宮にお見せすまい、宇治へ行こうとしても信頼する人にうとましい心ができているのであるからと中の君は思い、いよいよ右も左も頼むことのできない身に

なっていると思われ、どうしても自分は薄命な女なのであるとして、生きていくうちはあるがままの境遇を認めておおようにしていようと、こう決心をしたのであったから、可憐かれんに素直にして、嫉妬しつとも知らぬふうを見せていたから、宮はいっそう深い愛をお覚えになり、思いやりをうれしくお感じになって、おいでにならぬ間も忘れていたのではないということなどに言葉を尽くして夫人を慰めておいでになった。腹部も少し高くなり、恥ずかしがっている腹帯の衣服の上に結ばれてあるのにさえ心がお惹ひかれになった。まだ妊娠した人を直接お知りにならぬ方であったから、珍しくさえお思ひになった。何事もきれいに整い過ぎた新居においでになったあとで、ここにおいでになるのはすべての点で気安く、なつかしくお思われになるままに、こまやか

な将来の日の誓いを繰り返し仰せになるのを聞いていても中の君は、男は皆口が上手で、あの無理な恋を告白した人も上手に話をしたと薫じょうずのことを思い出して、今までも情けの深い人であるとは常に思っていたが、ああしたよしまな恋に自分は好意を持つべくもないと思うことによって、宮の未来のお誓いのほうは、そのとおりであるまいと思いなながらも少し信じる心も起こった。それにしてもああまで油断をさせて自分の室の中へあの人がいって来た時の驚かされようはどうだったであろう、姉君の意志を尊重して夫婦の結合は遂げなかったと話していた心持ちは、珍しい誠意の人と思われるのであるが、あの行為を思えば自分として気の許される人ではないと、中の君はいよいよ男の危険性に用心を感じるにつけても、宮がながく途絶えておいでに

ならぬことになれば恐ろしいと思われ、言葉には出さないのであるが、以前よりも少し宮へ甘えた心になっていたために、宮はなお可憐に思召され、心を惹かれておいでになったが、深く夫人にしみついてゐる中納言のにおいは、薫香くんこうをたきしめたのには似ていず特異な香であるのを、においというものをよく研究しておいになる宮であつたから、それとお気づきになつて、奇怪なこととして、何事かあつたのかと夫人を糺ただそうとされる。宮の疑つておいでになることと事実とはそうかけ離れたものでもなかつたから、何ともお答えがしにくくて、苦しそうに沈黙しているのを御覧になる宮は、自分の想像することはありうべきことだ、よも無関心ではおられまいと始終自分は思つていたのであるとお胸が騒いだ。薫のにおいは中の君が下の単衣ひとえなども昨

夜のとは脱ぎ替えていたのであるが、その注意にもかかわらず全身に沁^しんでいたのである。

「あなたの苦しんでいるところを見ると、進むところへまで進んだことだろう」

とお言いになり、追究されることで夫人は情けなく、身の置き所もない気がした。

「私の愛はどんなに深いかもしれないのに、私が二人の妻を持つようになったからといって、自分も同じように自由に人を愛しようといううなことは身分のない者のすることですよ。そんなに私が長く帰って来ませんでしたか、そうでもないではありませんか。私の信じていたよりも愛情の淡^{うす}いあなただった」

などとお責めになるのである。愛する心からこうも思われるのであるというふうにお訊ききになつても、ものを言わずにいる中の君に嫉妬しつとをあそばして、

またびとになれける袖そでの移り香をわが身にしめて恨みつるかな

とお言いになつた。夫人は身に覚えのない罪をきせておいでになる宮に弁明もする気にならずに、

「あなたの誤解していらっしゃることについて何と申し上げていいかわかりません。

見なれぬる中の衣と頼みしをかばかりにてやかけ離れなん」

と言つて泣いていた。その様子の限りなく可憐かれんであるのを宮は御覽になつても、こんな魅力が中納言を惹ひきつけたのであらうとお思ひになり、いつそうねたましくおなりになり、御自身もほろほろと涙をおこぼしになつたというのは女性的なことである。どんな過失が仮にあつたとしても、この人をうとんじてしまうことはできないふうな、美しいいたいたしい中の君の姿に、恨みをばかり言つておいでになることができずに、宮は歎いている人の機嫌きげんを直させるために言い慰めもしておいでになつた。

翌朝もゆるりと寝ておいでになつて、お起きになつてからは手水ちようずも

朝の粥もこちらでお済ませになった。座敷の装飾も六条院の新婦の居間の輝くばかり朝鮮、支那の錦で装飾をし尽くしてある目移しには、なごやかな普通の家の居ごこちよさをお覚えになって、女房の中には着疲れさせた服装の混じっていたりして、静かに見まわされる空気が作られていた。夫人は柔らかな淡紫などの上に、撫子色の細長をゆるやかに重ねていた。何一つ整然としていぬものもないような盛りの美人の新婦に比べてごらんになっても、劣ったともお思われにならず、なつかしい美しさの覚えられるというのは宮の御愛情に相当する人というべきであろう。円く肥えていた人であったが、少しほっそりとなり、色はいよいよ白くて上品に美しい中の君であった。怪しい疑いを起こさせるにおいなどのついていなかった常の時にも、愛嬌のあ

る可憐な点はだれよりもすぐれていると見ておいでになった人であるから、この人を兄弟でもない男性が親しい交際をして自然に声も聞き、様子もうかがえる時もあつては、どうして無関心でいられよう、必ず結果は恋を覚えることになるであろうと、宮は御自身の好色な心から想像をあそばして、これまでから恋をささやく明らかな証^{あかし}の見え^{だな}る手紙などは来ていぬかとお思ひになり、夫人の居間の中の飾り棚や小さい唐櫃^{からびつ}などというものの中をそれとなくお捜しになるのであつたが、そんなものはない。ただまじめなことの書かれた短い、文学的でもないようなものは、人に見せぬために別にもしてなくて、物に取り混ぜてあつたのを発見あそばして、不思議である、こんな用事を言うものにとどまるはずはないとお疑いの起こることで今日のお心が冷静

にならないのも道理である。夫人が魅力を持つばかりでなく中納言の姿もまた趣味の高い女が興味を覚えるのに十分なものであるから、愛に報いぬはずはない、よい一对の男女であるから、相思の仲にもなるであろうと、こんな御想像のされるために、宮はわびしく腹だたしく、ねたましくお思いになった。不安なお気持ちが静まらぬため、その日も二条の院にとどまっておいでになることになり、六条院へはお手紙の使いを二、三度お出しになった。わずかな時間のうちにもそうも言っておやりになるお言葉が積もるのかと老いた女房などは陰口を申していた。

中納言はこんなに宮が二条の院にとどまっておいでになることを聞いても苦しみを覚えるのであったが、自分は誤っている、愚かな情炎

を燃やしてはよろしくない、そうした愛でない清い愛で助けようと決心していた人に対して、思ふべからぬことを思つてはならぬとしいて思い返し、このままにしていっても、自分の気持ちは汲んでくれる人に違いないという自信の持てるのがうれしかった。女房たちの衣服がなつかしい程度に古びかかっていたようであつたのを思つて、母宮のお居間へ行き、

「品のよい女物で、お手もとにできているのがあるでしょうか、少し入り用なことがあるのです」

とお尋ねすると、

「例年の法事は来月ですから、その日の用意の白い生地などがあるだろうと思います。染めたものなどは平生たくさんは私の所に置いてな

いから、急いで作らせましょう」

宮はこうお答えになった。

「それには及びません。たいそうなことにいるのではありませんから、できているものでけっこうです」

と薫は申し上げて、裁縫係りの者の所へ尋ねにやりなどして、女の装束幾重ねと、美しい細長などをありあわせのまま使うことにして、下へ着る絹や綾あやなども皆添え、自身の着料にできていた紅あかい糊絹のりぎぬの槌つち目めの仕上りのよい物、白い綾の服の幾重ねへ添えたく思った袴はかまの地がなくて付け腰だけが一つあったのを、結んで加える時に、それへ、

結びける契りことなる下紐したひもをただひとすぢに恨みやはする

と歌を書いた。大輔たゆうの君という年のいった女房で、薫の親しい人の所へその贈り物は届けられたのである。

にわかに思い立って集めた品ですから、よくそろいもせず見苦しいのですが、よいように取り合わせてお使いください。

という手紙が添えられてあつて、夫人の着料のものは、目だたせぬようにしてはあつたが箱へ納めてあつて、包みが別になっていた。大輔は中の君へこの報告はしなかったが、今までからこうした好意の贈り物を受け馴なれていたことであつて、受け取らぬなどと返すべきでなかったから、どうしたものかとも心配することもなく女房たちへ分け与えたので、その人々は縫いにかかっていた。若い女房で宮御夫婦のおそばへよく出る人はことにきれいにさせておこうとしたことだと思

われる。下仕えの女中などの古くなつた衣服を白の袷あわせに着かえさせることにしたのも目だたないことでかえつて感じがよかつた。

この夫人のために薰以外にだれがこうした物質の補いをする者があろう、宮は夫人を愛しておいでになつたから、すべて不自由のないようにと計らつてはおいでになるのであるが、女房の衣服のことまではお気のおつきにならないところであつた。大事がられて御自身でそうした物のことをお考えになることはなかつたのであるから、貧しさはどんなに苦しいものであるともお知りにならないのは道理なことである。寒けをさえ覚える恰好かつこうで花の露をもてあそんでばかりこの世はいくものように思つておいでになる宮とは違い、愛する人のためであるから、何かにつけて物質の補助を惜しまない薰の志をまれな好意と

してありがたく思っている人たちであるから、宮のお気のつかないことと、氣のよくつく薫とを比較して譏^{そし}るようなことを言う乳母^{めのと}などもあった。童女の中には見苦しくなった姿で混じっていたりするのも目につくことがおりおりあったりして、夫人はそれを恥ずかしく思い、この住居^{すまい}をしてかえって苦痛の多くなつたようにも人知れず思うことがないでもなかつたのであるのに、そしてこのごろは世の中の評判にさえなっている華美な宮の新婚後のお住居^{すまい}の様子などを思うと、宮にお付きしている役人たちもどんなにこちらを輕蔑^{けいべつ}するであろう、貧しさを笑うであろうという煩悶^{はんもん}を中の君がしているのを、薫が思いやつて知っていたのであったから、妹でもない人の所へ、よけいな出すぎたことをすると思われるこんなことも、侮^{あなご}つて礼儀を失つたのではな

く、目だつようにしないのは、自分に助けられている夫人の無力を思う人があつてはならないと思う心から、忍んでする薫であつた。この贈り物があつたために、女房の身なりをととのえさせることができ、桂を織うちぎらせたり、綾あやを買い入れる費用も皆与えることができた。薫も宮に劣らず大事にかしずかれて育つた人で、高い自尊心も持ち、一般の世の中から超越した貴族的な人格も持っているのであるが、宇治の八の宮の山莊へ伺うようになって以来、豊かでない家の生活の寂しさというものは想像以上のものであつたと同情を覚え、その御一家だけへではなく、物質的に恵まれない人々をあまねく救うようになったのである。哀れな動機というべきである。

薫はぜひとも中の君のために邪惡な恋は捨てて、清い同情者の地位

にとどまろうとするのであるが、自身の心が思うにまかせず、常に恋しくばかり思われて苦しいために、手紙をもつて以前よりもこまごま
と書き、不用意に恋の心が出たふうに見せたような消息をよく送るよ
うになったのを、中の君はわびしいことの添ってきた運命であると歎
いていた。まったく知らぬ人であつたならば、狂氣の沙汰さたとたしな
め、そうした心を退けるのが容易なことであろうが、昔から特別な後
援者と信頼してきて、今さら仲たがいをするのはかえって人目を引く
ことになるうと思ひ、さすがにまた薫の愛を憐あわれむ心だけはあるので
あつても、誘惑に引かれて相手をしているもののようにとられてはな
らぬとはばかり思われて煩悶はんもんがされた。女房たちも夫人の氣持ちのわかり
そうな若い人らは皆新しく京へ移つた前後から来てなじみが浅く、ま

たなじみの深い人たちといつては昔から宇治にいた老いた女房らであつたから、苦しいことも左右の者に洩もらすことができず、姉君を思ひ出さぬおりもなかつた。姉君さえおいでになれば中納言も自分へ恋をするようなことにはむろんならなかつたはずであると、大姫君の死が悲しく思われ、宮が二心をお持ちになり、恨めしいことも起こりそうに予想されることよりもこの中納言の恋を中の君は苦しいことに思つた。

薫はおさえきれぬものを心に覚えて、例のとおりにしんみりとした夕方に二条の院の中の君を訪たずねて来た。すぐに縁側へ敷き物を出させて、

「身体からだを悪くしております時で、お話を自身で伺えませんのが残念で

ございます」

と中の君が取り次がせて来たのを聞くと、薫は恨めしさに涙さえ落ちそうになったのを人目につかぬようにしいて紛らして、

「御病氣の時には、知らぬ僧でもお近くへまいるのですから、私も医師並みに御簾みすの中へお呼びいただいてもいいわけでしょう。こうした人づてのお言葉は私を失望させてしまいます」

と言ひ、情けなさそうにしているのを、先夜の事情を知っている女房らが、

「仰せになりますとおり、お席があまり失礼でございます」

と言ひ、中央の母屋もやの御簾を皆おろして、夜居の僧のはいる室へ薫を案内したのを、中の君は実際身体も苦しいのであったが、女房もこ

う言っているのに、あらわに拒絶するのもかえって人を怪しがらせる結果になるかもしれぬと思い、物憂^{ものう}く思いながら少しいざって出て話すことにした。

ごくほのかに時々ものを言う様子に、死んだ恋人の病気の初期のころのことが思われるのもよい兆候でないと薫は非常に悲しくなり、心が真暗^{まっくら}になり、すぐにもものが言われず、ためらいながら、話を続けた。ずっと奥のほうに中の君のいるのも恨めしくて、御簾の下から几^{きょ}帳^{よう}を少し押すような形にして、例のなれなれしげなふうを示すのが苦しく思われ、困ることに考えられて、中の君は少将の君という人をそばへ呼んで、

「私は胸が痛いからしばらくおさえて」

と言っているのを聞いて、

「胸はおさえるとなお苦しくなるものですが」

こう言つて歎息^{たんそく}を洩^もらしながら薫のすわり直したことにさえ、母屋^{もや}の中の夫人は不安が感ぜられた。

「どうしてそんなに始終お苦しいのでしょうか。人に聞きますと、初めのうちは気持ちが悪くてもまた快く癒^{なお}っている時もあると教えてくれました。あなたはそうお言いになつて若々しく私を警戒なさるのでしょう」

と薫の言うのを聞いて中の君は恥ずかしくなった。

「私は平生いつも胸が痛いのでございます。姉もそんなふうでございました。短命な人は皆こんなふうに煩うものだとか申します」

と言った。だれも千年の松の命を持っているのではないから、あるいはそんな危険が近づいているのであるかもしれぬと思うと、薫には今の言葉が身に沁しんで哀れに思われてきて、夫人がそばへ呼んだ女房の聞くのとはわかる気にはならず、きわめて悪い所だけは口にせぬものの、昔からどんなに深く愛していたかということ、中の君にだけは意味の通じるようにして言い、人には友情とより聞こえぬ上手じょうずな話し方を薫がしているために、その人は、今までからだれもが言うとおりに珍しい人情味のある人であるとそばにいて思っていた。表はおおかた総角あげまきの姫君と死別した尽きもせぬ悲しみを話題にしているのであった。

「私は少年のころから、この世から離れた身になりたい、正しく仏道

へ踏み入るにはどうすればよいかと願うことはそれだけだったのですが、前生の因縁というものだったのでしょいか、そう御接近したわけでもないあの方を恋しく思い始めました時から、私の信仰に傾いた心が違ってきてまして、またお死なせしてからはこちらの女性と交渉を始めるともして、悲痛な心を慰めようとしたこともありましたが、そんなことは何の効果もあるものでないことが確かにわかりました。私に魅力を及ぼす人がほかにはこの世にいないことがわかりましたから、好色らしいと誤解されますのは恥ずかしいのですがそうした不良性な愛であなたをお思いしてこそ無礼きわまるものでしょうが、私の望むところは淡々たるもので、ただこれほどの隔てで時々あなたへ直接その時その気持ちを話し申し上げて、そしてなんとかお言葉

をいただくことができます程度の睦^{むつ}まじさで御交際することはだれも非難のいたしようもないことでしょう。私の変わった性情は世間一般の人が認めているのですから、どこまでもあなたは御安心しててください」

などと、恨みもし、泣きもして薫は言うのである。

「御信用しておりませんでしたなら、こんなふうに誤解もされんばかりにまであなたと近しくお話などはいたしませんでしょう。長い間、父のため、姉のために御好意をお見せくださいましたことをよく存じているものですから、普通には説明のできない間柄の保護者と御信頼申し上げて、ただ今ではこちらから何かと御無心に出したりもいたしております」

「そんなことがありましたかどうだか私に覚えはないようです。そればかりのことかもしれないそうにおっしゃるではありませんか。今度宇治へおいでになりたいという御相談でやっと私の存在をお認めになったようなわけではありませんか。それだけでも哀れな私は満足ができたのですよ。誠意のある者とおわかりになってくださったのですから、非常にありがたく思っております」

こんなふうに言つて、薫には飽き足らぬ恨めしい心は見えるのであるが、聞いている者がいるのであつては、思うままのことを言いえようはずもない。庭のほうへ目をやっていると、秋の日が次第に暗くなり、虫の声だけが何にも紛れず高く立っているが、築山のほうはもう闇やみになっている。こんな時間になつても驚かずしめやかなふうで柱に

よりかかつて、去ろうと薫のしないのに中の君はやや当惑を感じていた。「恋しさの限りだにある世なりせば」（つらきをしひて歎かざまし）などと低い声で薫は口ずさんでから、

「私はもうしかたもない悲しみの囚とりこになってしまったのです。どこか閑居をする所がほしいのですが、宇治辺に寺というほどのものでなくとも一つの堂を作って、昔の方の人型ひとがた（祓はらいをして人に代わって川へ流すもの）か肖像を絵に描かかせたのかを置いて、そこで仏勤めをしようという気に近ごろなりました」

と言った。

「身にしむお話でございますけれど、人型とお言いになりますので『みたらし川にせし禊みそぎ』（恋せじと）というようなことが起こるので

はないかという不安も覚えられます。代わりのものは真のものでございませんからよろしくございませんから昔の人に氣の毒でございませぬ。黄金こがねを与えなければよくは描かいてくれませんような絵師があるかもしれないぬと思われませう」

こう中の君は言う。

「そうですよ。その絵師というものは決して氣に入った肖像を作ってくれないでしょうからね。少し前の時代にその絵から眞実の花が降ってきたとかいう伝説の絵師がありますがね、そんな人がいてくれればね」

何を話していても死んだ人を惜しむ心があふれるように見えるのを中の君は哀れにも思い、自身にとって一つの煩わしさにも思われるの

であつたが、少し御簾みすのそばへ寄つて行き、

「人型とお言いになりましたことで、偶然私は一つの話进行思い出しました」

と言ひ出した。その様子に常に超こえた親しみの見えるのが薰はうれしくて、

「それはどんなお話でしょう」

こう言いながら几帳の下から中の君の手をとらえた。煩わしい気持ちに中の君はなるのであつたが、どうにかしてこの人の恋をやめさせ、安らかにまじわっていききたいと思う心があるため、女房へも知らせぬようにさりげなくしていた。

「長い間そんな人のいますことも私の知りませんでした人が、この夏

ごろ遠い国から出てまいりまして、私のここにいますことを聞いて音^{たよ}信^りをよこしたのですが、他人とは思いませんものの、はじめて聞いた話を軽率^{けいそつ}にそのまま受け入れて親しむこともできぬような気になっておりましたのに、それが先日ここへ逢^あいにまいりました。その人の顔が不思議なほど亡^なくなりました姉に似ていましたのでね、私は愛情らしいものを覚えたのです。形見に見ようと思召すのには適當でございませんことは、女たちも姉とはまるで違つた育ち方の人のようだと言っていたことで確かでございますが、顔や様子がどうしてあんなにも似ているのでしょうか。それほどなつながりでもございませぬのに」

この中の君の言葉を薰はあるべからざる夢の話ではないかとまで思つて聞いた。

「しかるべきわけのあることであなたをお慕いになっておいでになったのでしょう。どうしてただ今までその話を少しもお聞かせくたさらなかったのでしょうか」

「でも古い事実は私に否定も肯定もできなかったものでございますからね。何のたよりになるものも持たずにさすらっている者もあるだろうとおっしゃって、気がかりなふうにお父様が時々お洩らしになりましたことなどで思い合わされることもあるのですが、過去の不幸だった父がまたそんなことで冷嘲れいちようされますことの添いますのも心苦しゅうございまして」

中の君のこの言葉によれば、八の宮のかりそめの恋のお相手だった人が得ておいた形見の姫君らしいと薫は悟った。大姫君に似たと言わ

れたことに心が惹^ひかれて、

「そのよくおわかりにならないことはそのままでもいいのですから、もう少しくわしくお話をしてくださいませんか」

と中納言は望んだが、羞恥^{しゆうち}を覚えて中の君は細かなことを言つて聞かせなかった。

「その人を知りたく思召すのでございましたら、その辺と申すことくらいはお教え申してもいいのでございますが、私もくわしくは存じません。またあまり細かにお話をいたせばいやにおなりになることに違いございませんし」

「幻術師を遠い海へつかわされた話にも劣らず、あの世の人を捜し求めたい心は私にもあるのです。そうした故人の生まれ変わりの人と見

ることはできなくても、現在のような慰めのない生活をしているよりはと思う心から、その方に興味が持たれます。人型として見るのに満足しようとする心から申せば山里の御堂の本尊を考^{みどう}えないではおられません。なおもう少し確かな話を聞かせてくださいませんか」

中納言は新しい姫君へにわかに関心を持ち出して中の君を責めるのだった。

「でもお父様が子と認めてお置きになったのでもない人のことを、こんなにお話ししてしまいますのは軽率なことなのですが、神通力のある絵師がほしいとお思になるあなたをお気の毒に思うものですか
ら」

こう言ってから、さらに、

「長く遠い国でなど育てられていましたことで、その母が不憫ふびんがりまして、私の所へいろいろと訴えて来ましたのを、冷淡に取り合わずにいることはできないでいますうちに、ここへまいったのです。ほのかにしか見るのができませんでしたせいですか、想像していましたよりは見苦しくなく見えました。どういう結婚をさせようかと、それを母親は苦勞にしている様子でしたが、あなたの御堂の仏様にしていたきますことはあまりに過分なことだと思います。それほどの資格などはどうしてあるものではありません」

など夫人は言った。それとなく自分の恋を退ける手段として中の君の考えついたことであろうと想像される点では恨めしいのであったが、故人に似たという人にはさすがに心の惹ひかれる薫であつた。自分

の恋をあるまじいこととは深く思いながらも、あらわに侮蔑ぶべつを見せぬ
のも中の君が自分へ同情があるからであらうと思われる点で興奮をし
て中納言が話し続けているうちに夜もふけわたったのを、夫人は人目
にどう映ることかという恐れを持って、相手の隙すきを見て突然奥へは
いってしまったのを、返す返すも道理なことであると思ひながらも薰
は、恨めしい、くちおしい気持ちで静められなくて涙までもこぼれて
くる不体裁さに恥じられもして、複雑な悶もだえをしながらも、感情にま
かせた乱暴な行為に出ることは、恋人のためにも自分のためにも悪い
ことであろうと、しいて反省をして、平生よりも多く歎息をしながら
辞去した。

こんなに恋しい心はどう処理すればいいのであろう、これが続いて

いくばかりでは苦しさに堪えられなくなるに違いない、どんなにすれば世間の非難も受けず、しかも恋のかなうことになるであろうなどと、多くの恋愛に鍛え上げてきた心でない青年の中納言であるせいか、自身のためにも中の君のためにも無理で、とうてい平和な道のありえない思いをし続けてその夜は明かした。似ているとあの人が言った人をそのとおりに信じて情人の関係を結ぶようなことはできない、地方官階級の家で養われている人であれば、こちらで行なおうとすることに障害になるものもないであろうが、本人の意志でもない関係を結ぶのはおもしろくないことに相違ないなどと思い、話を聞いた時には一時的に興奮を感じたものの、冷静になってみれば心をさほど惹く価値もないことと薰はしているのであった。

宇治の山莊を長く見ないでいるといつそうに恋しい昔と遠くなる気がして心細くなる薫は、九月の二十幾日に出かけて行つた。主人のな
い家は河風かわかぜがいつそう吹き荒らして、すごい騒がしい水音ばかりが留
守居をし、人影も目につくかつかぬほどにしか徘徊はいかいしていない。ここ
に来てこれを見た時から中納言の心は暗くなり、限りもない悲しみを
覚えた。弁の尼に逢あいたいと言うと、障子口をあけ、青鈍色あおにびの几帳の
すぐ向こうへ来て挨拶あいさつをした。

「失礼なのでございますが、このごろの私はまして無気味な姿になつ
ているのでございますから、御遠慮をいたすほうがよいと思われまし
て」

と言ひ、顔は現わさない。

「どんなにあなたが寂しく暮らしておいでになるだろうと思うと、そのあなただけが私の悲しみを語る唯一の相手だと思われて出て来ましたよ。年月はずんずんたっていきました、あれから」

涙を一目浮かべて薫がこう言った時、老女はましてとめようもない泣き方をした。

「御自身のためでなく、お妹様のために深い物思いを続けておいでになったところは、こんな秋の空であつたと思ひ出しますと、いつでも寂しい私ではございましたも、特別に秋風は身に沁しんで辛つらうございました。実際今になりますと、大姫様の御心配あそばしましたのがごもつともなような現象が京では起こつてまいつたようにここでも承りますのは悲しゅうございます」

「一時はどんなふうに見えることがあっても、時さえたてばまた旧態にもどるものであるのに、あの方が一途に悲観をして病氣まで得ておしまいになったのは、私がよく説明をしなかったあやまりだと、それを思うと今も悲しいですよ。中姫君の今経験しておられるようなことは、まず普通のことと言わねばなりませんまい。決して宮の御愛情は懸念を要するような薄れ方になっていないと思われます。それよりも言っても言っても悲しいのはやはり死んだ方ですよ。死んでしまつてはもう取り返しようがない」

と言つて薫は泣いた。
かおる

薫は阿闍梨を寺から呼んで、大姫君の忌日の法会に供養する経巻や仏像のことを依託した。また、

「私はこんなふうには時々ここへ来ますが、来てはただ故人の死を悲しむばかりで、霊魂の慰めになることでもない無益な歎きをせぬために、この寢殿を壊^{こぼ}つてお山のそばへ堂にして建てたく思うのです。同じくは速くそれに取りかからせたいと思っています」

とも言い、堂を幾つ建て、廊をどうするかということについて、それぞれ書き示しなど薫のするのを、阿闍梨は尊い考えつきであると並み並みならぬ賛意を表していた。

「昔の方が風雅な山荘として地を選定してお作りになった家を壊^{こぼ}つことは無情なことのようにもありますが、その方御自身も仏教を唯一の信仰としておられて、すべてを仏へささげたく思召してもまた御遺族のことをお思いになって、そうした御遺言はしておかれなかったのか

と解釈されます。今では兵部卿親王ひょうぐきょうの夫人の御所有とすべき家であつてみれば、あの宮様の御財産の一つですから、このお邸やしきのままで寺にしては不都合でしょう。私としてもかつてにそれはできない。それに地所もあまりに川へ接近していて、川のほうから見え過ぎる、ですから寢殿だけを壊こぼつて、ここへは新しい建物を代わりに作つて差し上げたい私の考えです」

と薫が言うと、

「きわめて行き届いたお考えでけっこうです。最愛の人を亡なくしましてから、その骨を長年袋へ入れ頸くびへ掛けていた昔の人が、仏の御方便でその袋をお捨てさせになり、信仰の道へはいったという話もございます。この寢殿を御覧になるにつけましてもお心を悲しみに動かすと

いうことはむだなことです。御堂をお建てになることは多くの人を新しく道に導くよき方法でもあり、御靈魂をお慰め申すにも役だつことでもございます。急いで取りかかりましょう。陰陽の博士おんようはかせが選びます吉日に、経験のある建築師二、三人をおよこしてくださいましたならば、細かなことはまた仏家の定式がありますから、それに準じて作らせることにいたしましょう」

阿闍梨はこう言つて受け合つた。いろいろときめることをきめ、領地の預かり人たちを呼んで、御堂の建築の件について、すべて阿闍梨の命令どおりにするようにと薫は言いつけたりしているうちに短い秋の日は暮れてしまったので、山荘で一泊していくことに薫はした。

この寝殿を見ることも今度限りになるであろうと思い、薫はあちら

こちらの間をまわって見たが、仏像なども皆御寺のほうへ移してしまつたので、弁の尼のお勤めをするだけの仏具が置かれてある寂しいぶつま仏室を見て、こんな所にどんな気持ちで彼女は毎日暮らしているのであろうと薫は哀れに思った。

「この寢殿は建て直させることにします。でき上がるまでは廊の座敷へ住んでおいでなさい。二条の院の女王様によおうのほうへお送りすべきものは私の莊園の者を呼んで持たせておあげなさい」

などと薫はこまごまとした注意までも弁の尼にしていた。ほかの場所ではこんな老いた女などは視野の外に置いて関心を持たずにいるのであろうが、弁に対しては深い同情を持つ薫は、夜も近い室へ寝させて昔の話をした。弁も聞く人のないのに安心して、藤大納言とうのことな

どもこまごまと薫に聞かせた。

「もう御容体がおむずかしくなりましてから、お生まれになりました方をしきりに見たく思召す御様子のございましたのが始終私には忘れられないことだったのでございましたのに、その時から申せばずっと末の世になりまして、こうしてお目にかかることができますのも、大納言様の御在世中真心でお仕えいたしました報いが自然に現われてまいりましたのかと、うれしくも悲しくも思い知られるのでございます。長過ぎる命を持ちまして、さまざまの悲しいことにあうと申す私の宿命が恥ずかしく、情けなくてなりません。二条の院の女王様から時々逢いに出て来い、それきり来ようとしなひのは私を愛していないのだろうなどとおっしゃってくださいさるおりもございますが、縁起の

悪い姿になった私は、もう阿弥陀様あみだ以外にお逢い申したい方もござい
ません」

などと弁の尼は言つた。大姫君の話も多く語つた。親しく仕えて見
聞きした話をし、いつどんな時にこうお言いになったとか、自然の風
物に心の動いた時々、故人の詠よんだ歌などを、不似合いな語り手と
は見えずに、声だけは慄ふるえていたが上手じょうずに伝え、おおようで言葉の少
ない人であつたが、そうした文学的などころもあつたかと、薫はさら
に故人をなつかしく思つた。宮の夫人はそれに比べて少し派手はでな性質
であつて、心を許さない人には毅然きぜんとした態度もとる型の人らしくは
あるが、自分へは同情が深く、どうして自分の恋から身をはずそう、
事のない友情だけで永久に親しみたいと思うところがあると薫は二人

の女王を比較して思ったりした。こんな話のついでにあの人型のことを薫は言い出してみた。

「京にこのごろその人はいるのでございますかねえ。昔のことを私は人から聞いて知っているだけでございます。八の宮様がまだこの山荘へおいでになりませぬ以前のことと、奥様がお亡れかくになつて近いころに中將の君と言つておりました、よい女房で、性質などもよい人を、宮様はかりそめなように愛人にあそばしたのを、だれも知つた者はございませんでしたところ、女の子をその人が生みました時に、宮様がそんなことが起こるかもしれぬという懸念けねんを持つておいでになつたものですから、それ以後の御態度がすっかりと変わりました、絶対に近づきになることはなかつたのでございます。それが動機であります

さびというものにお懲りになりました、坊様と同じ御生活をあそばす
ことになったので、中將はお仕えしていますこともきまり悪くなりま
して下がったのですが、それからのに陸奥守の家内になつて任国へ
行つておりました、上京しました時に、姫君は無事に御成長なさいま
したとこちらへほのめかしてまいりましたのを、宮様がお聞きになり
まして、そんな音信をこちらへしてくる必要はないはずだと言ひ切つ
ておしまいになりましたので、中將は歎いていたと申します。それが
また主人が常陸介になつていっしょに東へまいりましたが、それきり
消息をだれも聞かなかつたのでございます。この春常陸介が上つてま
いりまして、中將が中の君様の所へ訪ねてまいりましたと申すことは
ちよつと聞きましたでございます。姫君は二十くらいになつていらつ

しやるのでしよう。非常に美しい方におなりになったのを拝見する悲しさなどを、まだ中將さんの若いころ小説のようにして書いたりしたこともございました」

すべてを聞いた薫は、それではほんとうのことらしい。その人を見たいという心が起こった。

「昔の姫君に少しでも似た人があれば遠い国へでも尋ねて行きたい心のある私なのだから、子として宮がお数えにならなかったとしても結局妹さんであることは違いのないことなのですから、私のこの心持ちをわざわざ正面から伝えるようにはなく、こう言っていたただけを、何かの手紙が来たついでにでも言っておいてください」

とだけ薫は頼んだ。

「お母さんは八の宮の奥様の姪めいにあたる人なのでございます。私とも血の続いた人なのですが、昔は双方とも遠い国に住んでいまして、たびたび逢うようなことはなかったのでございます。先日京から大輔たゆうが手紙をよこしまして、あの方がどうかして宮様のお墓へでもお行きになりたいと言っていていらっしゃるから、そのつもりでということでしたが、中將からは久しぶりの音信たよりというものもくれません。でございますからそのうちこちらへお見えになるでしょう。その節にあなた様の仰せをお伝えいたしましょう」

夜が明けたので薫は帰ろうとしたが、昨夜遅れて京から届いた絹とか綿とかいうような物を御寺みでらの阿闍梨あじやりへ届けさせることにした。弁の尼にも贈った。寺の下級の僧たち、尼君の召使いなどのために布類ま

でも用意させてきて薫は与えたのだった。心細い形の生活であるが、
こうして中納言が始終補助してくれるために、氣楽に質素な暮らしが
弁にできるのである。

堪えがたいまでに吹き通す木枯しに、残る枝もなく葉を落とした紅もみ
葉の、積もりに積もり、だれも踏んだ跡も見えない庭にながめ入つ
て、帰って行く氣の進まなく見える薫であつた。よい形をした常磐木ときわぎ
にまとつた蔦つたの紅葉だけがまだ残つた紅あかさであつた。こ・だ・に・の・蔓つるなど
を少し引きちぎらせて中の君への贈り物にするらしく薫は従者に持た
せた。

やどり木と思ひ出いでずば木のもとの旅寝もいかに寂しからまし

と口ずさんでいるのを聞いて、弁が、

荒れはつる朽ち木のもとを宿り木と思ひおきけるほどの悲しさ

という。あくまで老いた女らしい尼であるが、趣味を知らなくないことで悪い気持ちは中納言にしなかった。

二条の院へ宿り木の紅葉を薫の贈ったのは、ちょうど宮が来ておいでになる時であった。

「三条の宮から」

と言って使いが何心もなく持って来たのを、夫人はいつものとおり自分の困るようなことの書かれてある手紙が添っているのではないか

と気にしていたが隠しうるものでもなかった。宮が、

「美しい蔦だね」

と意味ありげにお言いになって、お手もとへ取り寄せて御覧になるのであったが、手紙には、

このごろはどんな御様子でおられますか。山里へ行つてまいりまして、さらにまた峰の朝霧に悲しみを引き出される結果を見ました。

そんな話はまたまいって申し上げましょう。あちらの寢殿を御堂に直すことを阿闍梨あじやりに命じて来ました。お許しを得ましてから、他の場所へ移すことにも着手させましょう。弁の尼へあなたから御承諾になるならぬをお言いやりになってください。

こう書かれてあった。

「よくもしらじらしく書けた手紙だ。私がこちらにいと聞いていたのだろう」

と宮はお言いになるのであった。少しはそうであつたかもしれない。夫人は用事だけの言われてあつたのをうれしく思つたのであるが、どこまでも疑つたものの言いようを宮があそばすのをうるさく思ひ、恨めしそうにしている顔が非常に美しくて、この人が犯せばどんな過失も許す氣になるであらうと宮は見ておいでになつた。

「返事をお書きなさい。私は見ないようにしているから」

宮はわざとほかのほうへ向いておしまひになつた。そうお言いになつたからと言って、書かないでは怪しまれることであらうと夫人は思ひ、

山里へおいでになりましたことはおうらやましいことと承りました。あちらは仰せのように御堂にいたすのがよろしいことと思っております。しかしまた私自身のために隠れ家として必要のあることを思い、荒廢はいたさせたくない願いもあつたのですが、あなたのお計らいで両様の望みがかないますればありがたいことと存じます。

と返事を書いた。こんなふうの友情をかわすだけの二人であろうと思っておいでになりながらも、御自身のお心慣らいから秘密があるように察せられて、御不安がのけがたいのであろう。枯れ枯れになつた庭の植え込みの中の薄が何草よりも高く手を出して招いている形が美しく、また穂を持たないのも露を貫き玉を掛けた身をなびかせている

ことなどは平凡なことであるが夕風の吹いている草原は身にしむことが多いものである。

穂にいでぬ物思ふらししのすすき招く袂たもとの露しげくして

柔らかになつたお小袖こそでの上に直衣のうしだけをお被きになり、琵琶びわを宮は弾ひいておいでになつた。黄鐘調おうじきちようの搔かき合わせに美しい音を出しておいになる時、夫人は好きな音楽であつたから、恨めしいふうばかりはしておられず、小さい几帳きちようの横から脇息きようそくによりかかつて少し姿を現わしているのが非常に可憐かれんに見えた。

「あきはつる野べのけしきもしの薄ほすすきのめく風につけてこそ知れ

『わが身一つの』（おほかたのわが身一つのうきからになべての世をも恨みつるかな）」

と言ううちに涙ぐまれてくるのも、さすがに恥ずかしく扇で紛らしているその気分も愛すべきであると宮はお思われになるのであるが、こんな人であるからほかの男も忘れがたく思うのであろうと疑いをお持ちになるのが夫人の身に恨めしいことに相違ない。白菊がまだよく紫に色を変えないで、いろいろ繕われてあるのはことに移ろい方のおそい中にどうしたのか一本だけきれいに紫になっているのを宮はお折らせになり「花中偏愛菊」はなのなかにひとへにきくをあいすずと誦しておいでになったが、

「某親王なにがしがこの花を愛しておいでになった夕方ですよ、天人が飛んできて琵琶びわの手を教えたというのはね。何事もあさはかになって天人の心を動かすような音楽というものははや地上からなくなってしまったのは情けない」

とお言いになり、楽器を下へ置いておしまいになったのを、中の君は残念に思い、

「人間の心だけはあさはかにもなったでしょうが、昔から伝わっております音楽などはそれほどにも墮落はしておりませんでしょう」

こう言つて、自身でおぼつかなくなっている手を耳から探り出したいと願うふうが見えた。宮は、

「それでは単独ひとりで弾ひいているのは寂しいものだから、あなたが合わせ

なさい」

とお言いになって、女房に十三絃げんをお出させになって、夫人に弾かせようとあそばされるのだったが、

「昔は先生になってくださる方がございましたけれど、そんな時にもろくろく私はお習い取りすることはできなかったのですもの」

恥ずかしそうに言つて、中の君は楽器に手を触れようもしない。

「これくらいのことにもまだあなたは隔てというものを見せるのは情けないではありませんか、このごろ通つて行く所の人は、まだ心が解けるといふほどの間柄になつていないのに、未成品的な琴を聞かせなさいと言えは遠慮をせずに弾きますよ。女は柔らかい素直なのがいいとあの中納言も言っていましたよ。あの人へはこんなに遠慮をばかり

見せないのでしょう。非常な仲よしなのだから」

などと薫かおるのことまでも言葉に出してお恨みになったため、夫人は歎息をしながら少し琴を弾いた。近ごろ使われぬ琴は緒がゆるんでいたから盤渉調ばんじやうようにしてお合わせになった。夫人の掻き合わせの爪音つまおとが美しい。催馬楽さいばらの「伊勢いせの海」をお歌いになる宮のお声の品よくおきれいであるのを、そつと几帳の後ろなどへ来て聞いていた女房たちは満足した笑みえを皆見せていた。

「二人の奥様をお持ちあそばすのはお恨めしいことですが、それも世のならわしなのですからね、やはりこの奥様を幸福な方と申し上げるほかはありませんよ。こうした所の大事な奥様になつてお暮らしになる方とは思ふこともできませんようでしたもとの生活へ、また歸りた

いようによくおつしやるのはどうしたことでしょう」

といちずになつて言う老いた女房はかえつて若い女房たちから、

「静かになさい」

と制されていた。

琵琶^{びわ}などをお教えになりながら三、四日二条の院に宮がとどまつておいでになり、謹慎日になつたからというような口実を作つて六条院へおいでにならないのを左大臣家の人々は恨めしがつてい、大臣が御所から退出した帰り路^{みち}に二条の院へ出て来た。

「たいそうなふうをして何しにおいでになつたのかと言いたい」

などとお言ひになり、宮は不機嫌^{ふきげん}になつておいでになつたが、客殿のほうへ行つて御面会になつた。

「何かの機会のない限りはこの院へ上がることがなくなっております私には目に見るものすべてが身に沁^しんでなりません」

とも言い、六条院のお話などをしばらくしていたあとで、大臣は宮をお誘い出して行くのであった。子息たちその他の高級役人、殿上役人なども多く引き連れている勢力の偉大さを見て、比較にもならぬ世間的に無力な身の上を中の君は思つてめいつた気持ちになっていた。女房らはのぞきながら、

「ほんとうにおきれいな大臣様、あんなにごりつぱな御子息様たちで、皆若盛りでお美しいと申してよい方たちが、だれもお父様に及ぶ方はないじゃありませんか、なんという美男でいらつしやるのでしよう」

と中には言う者もあつた。また、

「あんなおおぎようなふうをなすつて、わざわざお迎えなどにおいでになるなんてくちおしい。世の中つて楽なものではありませんね」

と歎息する女もあつた。夫人自身も寂しい来し方を思い出し、あのはなやかな人たちの世界の一角いちぐうを占めることは不可能な影の淡い身の上であることがいよいよ心細く思われて、やはり自分は宇治うすへ隠退してしまふのが無難であろうと考えられるのであつた。

日は早くたち年も暮れた。一月の終わりにから普通でない身体の苦痛を夫人は感じだしたのを、宮もまだ産をする婦人の悩みをお見になつた御経験はなかつたので、どうなるのかと御心配をあそばして、今まで祈禱きとうなどをほうぼうでさせておいでになつた上に、さらにほかでも

修法を始めることをお命じになった。非常に容体が危険に見えたために中宮ちゅうぐうからもお見舞いの使いが来た。中の君が二条の院へ迎えられてから足かけ三年になるが、御良人おっとの宮の御愛情だけはおろそかなものでないだけで、一般からはまだ直接親王夫人に相当する尊敬は払われていなかったのに、この時にはだれも皆驚いて見舞いの使いを立て、自身でも二条の院へ来た。

源中納言は宮の御心配しておいでになるのにも劣らぬ不安を覚えて、気づかわしくてならないのであっても、表面的な見舞いに行くほかは近づいて尋ねることもできずに、ひそかに祈祷などをさせていた。この人の婚約者の女二にょにの宮みやの裳着もぎの式が目前のことになり、世間はその日の盛んな儀礼の用意に騒いでいる時であって、すべてを帝御みかど

自身が責任者であるようにお世話をあそばし、これでは後援する外戚がいせきのないほうがかえって幸福が大きいたとも見られ、亡なき母君の藤壺ふじつぼの女御ごが姫宮のために用意してあつた数々の調度の上に、宮中の作物所つくりものどころとか、地方長官などとかへ御下命になつて作製おさせになつたものが無数にでき上がつてい、その式の済んだあとで通い始めるようにとの御内意が薫へ伝達されている時であつたから、婿方でも平常と違ふ緊張をしているはずであるが、なおいままでどおりにそちらのことはどうでもいいと思われ、中の君の産の重いことばかりを哀れに思つて歎息を続ける薫であつた。

二月の朔日ついたちに直物なおしものといつて、一月の除目じもくの時にし残された官吏の昇任更任の行なわれる際に、薫は権大納言ごんになり、右大将を兼任するこ

とになった。今まで左大將を兼ねていた右大臣が軍職のほうだけを辞し、右が左に移り、右大將が親補されたのである。新任の挨拶あいさつにほうぼうをまわった薫は、兵部卿ひょうぶきやうの宮へもまいった。夫人が悩んでいる時であつて、宮は二条の院の西の対においでになつたから、こちらへ薫は来たのであつた。僧などが来ていて儀礼を受けるには不都合な場所であるのにと宮はお驚きになり、新しいお直衣のうしに裾すその長い下襲したかさねを召してお身なりをおととのえになつて、客の礼に対する答とうの拝礼を階下へ降りてあそばされたが、大將もりつぱであつたし、宮もきわめてごりつぱなお姿と見えた。この日は右近衛府うこんえふの下僚の招宴をして纏頭てんとうを出すならわしであつたから、自邸では言っていたが、近くに中の君の悩んでいる二条の院があることで少し躊躇ちゆうちよしていると、夕霧の左大

臣が弟のために自家で宴会をしようと言いだしたので六条院で行なつた。皇子がたも相伴の客として宴にお列りになり、高級の官吏なども招きに応じて来たのが多数にあつて、新任大臣の大饗宴にも劣らない盛大な、少し騒がし過ぎるほどのものになった。兵部卿の宮も出ておいでになったのであるが、夫人のことがお気づかひしいために、まだ宴の終わらぬうちに急いで二条の院へお帰りになったのを、左大臣家の新夫人は不満足に思い、ねたましがった。同じほどに愛されているのであるが権家の娘であることに驕おごっている心からそう思われたのであろう。

ようやくその夜明けに二条の院の夫人は男児を生んだ。宮も非常にお喜びになった。右大将も昇任の悦よろこびと同時にこの報を得ることので

きたのをうれしく思った。昨夜の宴に出ていただいたお礼を述べに来るとともに、御男子出産の喜びを申しに、薫は家へ帰るとすぐに二条の院へ来たのであった。

兵部卿の宮がそのままずっと二条の院におられたから、お喜びを申しに伺候しない人もなかった。うぶやしない産養の三日の夜は父宮のお催しで、五日には右大将から産養を奉った。とんじき屯食五十具、ごて碁手の銭、おうばん椀飯などという定まったものはその例に従い、産婦の夫人へ料理の重ね箱三十、えいじ嬰兒の服を五枚重ねにしたもの、むつき襦袢などに目だたぬ華奢のかしや尽くされであるのも、よく見ればわかるのであった。父宮へも浅香木の折敷、おしき高坏たかつきなどに料理、ふずくめんるい（麺類）などが奉られたのである。女房たちは重詰めの料理のほかに、かご籠入りの菓子三十が添えて出された。たい

そうに人目を引くことはわざとしなかったのである。七日の夜は中宮からのお産養であつたから、席に列る人^{つらな}が多かつた。中宮大夫^{だゆう}を初めとして殿上役人、高級官吏は数も知れぬほどまいったのだつた。帝も出産^{きこしめ}を聞召して、兵部卿の宮がはじめて父になつた喜びのしるしをぜひとも贈るべきであると仰せになり、太刀^{たち}を新王子に賜わつた。九日も左大臣からの産養があつた。愛嬢の競争者の夫人を喜ばないのであるが、宮の思召しをはばかり、当夜は子息たちを何人も送り、接客の用を果たさせもした。

夫人もこの幾月間物思いをし続けると同時に、身体の苦しさも並み並みでなく、心細くばかり思つていたのであつたが、こうしたはなやかな空氣に包まれる日が来て少し慰んだかもしれない。

右大將はこんなふう^にに動揺されぬ位置が中の君にできてしまい、王子の母君となつてしまつては、自分の恋に対して冷淡さが加わるばかりであろうし、宮の愛はこの夫人に多く傾くばかりであろうと思われるのはくちおいしい氣のすることであつたが、最初から願つていた中の君の幸福というものがこれで確實になつたとする点ではうれしく思わないではいられなかつた。

その月の二十幾日に女二の宮の裳着の式が行なわれ、翌夜に右大將は藤壺へまいつた。^{ふじつば}これに儀式らしいものはなくて、ひそかなことになつていた。天下の大事のように見えるほどおかしきになつた姫宮の御良人^{おと}に一臣下の男がなるのに不満が覺えられる。婚約はお許しになつておいても、結婚をそう急いでおさせにならないでもよいではな

いかと非難らしいことを申す者もあつたが、お思い立ちになつたことはすぐ実行にお移しになる帝の御性質から、過去に例のないまで帝の婿として薫を厚遇しようとお考えになつてあそばすことらしかった。帝の御婿になる人は昔も今もたくさんあろうが、まだ御盛んな御在位中にただの人間のように婿取りに熱中あそばしたというようなことは少なかったであろう。左大臣も、

「右大將はすばらしい運命を持った男ですね。六条院すら朱雀院すざくの晩年に御出家をされる際にあの母宮をお得になつたくらいのことだし、私などはましてだれもお許しにならないのをかつてに拾つたにすぎない」

こんなことを言つた。夫人の宮はそれとおりであつたことがお恥ず

かしくて返辞をあそばすこともできなかった。

おおくらきよう

三日目の夜は大蔵卿を初めとして、女二の宮の後見に帝のあてておいでになる人々、宮付きの役人に仰せがあつて、右大将の前駆の人たち、隨身、車役、舎人^{とねり}にまで纏頭^{てんとう}を賜わつた。普通の家の新郎の扱ひ方に少しも変わらないのであつた。それからのは忍び忍びに藤壺へ薫は通つて行つた。心の中では昔のこと、昔にゆかりのある人のことばかりが思われて、昼はひねもす物思いに暮らして、夜になるとわが意志でもなく女二の宮をお訪ねに行くのも、そうした習慣のなかつた人であるからおつくうで苦しく思われる薫は、御所から自邸へ宮をお迎えしようと考えついた。そのことを尼宮はうれしく思召^{おぼしめ}して、御自身のお住居^{すまい}になつてゐる寢殿を全部新婦の宮へ譲ろうと仰せになつた

のであるが、それはもつたいないことであると薫は言つて、自身の念ねん誦ず講堂との間に廊を造らせていた。西側の座敷のほうへ宮をお迎えするつもりらしい。東の対なども焼けてのちにまたみごとな建築ができていたのをさらに設備を美しくさせていた。薫のそうした用意をしていることが帝のお耳にはいり、結婚してすぐに良人おとこの家へはいるのはどんなものであろうと不安に思召されるのであった。帝も子をお愛しになる心の闇やみは同じことなのである。尼宮の所へ勅使がまいり、お手紙のあつた中にも、ただ女二の宮のことばかりが書かれてあつた。お亡なくなりになった朱雀院が特別にこの尼宮を御援助になるようにと遺託しておありになったために、出家をされたのちでも二品内親王にほんの御待遇はお変えにならず、宮からお願いになることは皆御採用になると

いうほどの御好意を帝は示しておいでのたつたのである。こうした最高の方を舅君とし、母宮として、たいせつにお扱われする名誉もどうしたものか薫の心には特別うれしいとは思われずに、今もともすれば物思い顔をしていて、宇治の御堂の造営を大事に考えて急がせていた。

兵部卿の宮の若君の五十日になる日を数えていて、その式用の祝いの餅もちの用意を熱心にして、竹の籠かご、檜ひのきの籠などまでも自身で考案した。沈じんの木、紫檀したん、銀、黄金などのすぐれた工匠を多く家に置いている人であつたから、その人々はわれ劣らじと製作に励んでいた。

薫はまた宮のおいでにならぬひまに二条の院の夫人を訪れた。思ひなしに重々しさと高貴さが添つたように中の君を薫は思った。もう薫

は結婚もしたのであるから、自分の迷惑になるような気持ちは皆紛れてしまっているであろうと安心して夫人は出て来たのであったが、やはり同じように寂しい表情をし、涙ぐんでいて、

「自分の意志でない結婚をした苦痛というものはまた予想外に堪えられないものだとわかりまして、煩悶はんもんばかりが多くなりました」

と、新婦の宮に同情の欠けたようなことを薫かおるは言つて夫人に訴えた。

「とんだことをおつしやいます。そういうことをいつの間にか人が聞くようになってはたいへんですよ」

こう中の君は言いながらも、だれが見ても光栄の人になつていて、それにも慰められずまだ故人が忘れられないように言うこの人の愛の

純粹さをうれしく思っていた。姉君が生きていたらとも思うのであったが、しかしそれも自分と同じように勝ち味のない競争者を持って薄運を歎くにとどまることになったであろう、富のない自分らは世の中から何につけても尊重されていくものではないらしいとまた思うことによつて姉君がどこまでも情に負けず結婚はせまいとした心持ちのえらさが思われた。

薫が若君をぜひ見せてほしいと言っているのを聞いて、恥ずかしくは思いながら、この人に隔て心を持つようには取られたくない、無理な恋を受け入れぬと恨まれる以外のこと、この人の感情は害したくないと中の君は思い、自身では何とも返辞をせずに、乳母めのとに抱かせた若君を御簾みすの外へ出して見せさせた。いうまでもなく醜い子であるは

ずはない。驚くほど色が白く、美しくて、高い声を立てて笑^えんでみせる若君を見て薫は、これが自分の子であつたなれと思ひ、うらやましい氣のしたというのは、この人の心も人間生活に離れにくくなつたのであるうか。しかしこの人は、死んだ恋人が普通に自分の妻になつていて、こうした人を形見に残しておいてくれたならばと思うのであつて、自身が名誉な結婚をしたと見られている女二の宮から早く生まれる子があればよいなどとは夢にも考えないというのはあまりにも変わった人である。こんなふうに死んで取り返しのない人にばかり未練を持ち、新しい妻の内親王に愛情を持たないことなどはあまり書くのがお氣の毒である。こんな変人を帝が特にお愛しになつて、婿にまではあそばされるはずはないのである。公人としての才能が完全な

ものであつたのであらうと見ておくよりしかたがない。

これほどの若い人をはばかり見せてくれた夫人の好意もうれしくて、平生以上にこまやかに話をしているうちに日が暮れたため、他で夜の刻をふかしてはならぬ境遇になつたことも苦しく思い、薫は歎息を洩らしながら歸つて行つた。

「なんというよいにおいでしよう。『折りつれば袖こそにはへ梅の花』というように、鶯もかぎつけて来るかもしれませんね」
などと騒いでいる女房もあつた。

夏になると御所から三条の宮は方角塞がりになるために、四月の朔日の、まだ春と夏の節分の来ない間に女二の宮を薫は自邸へお迎えすることにした。

その前日に帝は藤壺へおいでになつて、藤花の宴をあそばされた。
南の庇ひさしの間の御簾みすを上げて御座の椅子いすが立てられてあつた。これは帝
のお催しで宮が御主催になつたのではない。高級役人や殿上人の饗膳きやうぜん
などは内蔵寮くらりようから供えられた。左大臣、按察使大納言、藤中納言、左
兵衛督ようえのかみなどがまいつて、皇子がたでは兵部卿ひようぶきようの宮、常陸ひたちの宮などが侍
された。南の庭の藤の花の下に殿上人の席ができてあつた。後涼殿の
東に楽人たちが召されてあつて、日の暮れごろから双調を吹き出し、
お座敷の上では姫宮のほうから御遊の楽器が出され、大臣を初めとし
て人々がそれを御前へ運んだ。六条院が自筆でおしたためになり、三
条の尼宮へお与えになつた琴の譜二巻を五葉の枝につけて左大臣は
持って出、由来を御披露ひろうして奉つた。次々に十三絃げん、琵琶びわ、和琴わごんの名

楽器が取り出された。朱雀院すざくくわんから伝わった物で薫の所有するものである。笛は柏木かしわぎの大納言が夢に出て伝える人を夕霧へ暗示した形見のもので、非常によい音ねの出るものであると六条院がお愛しになったものを、右大将へ贈るのはこの美しい機会以外にないと思い、薫のためにこの人が用意してきたのであるらしい。大臣に和琴、兵部卿の宮に琵琶の役を仰せつけになった。笛の右大将はこの日比類もなく妙音を吹き立てた。殿上役人の中にも唱歌の役にふさわしい人は呼び出され、おもしろい合奏の夜になった。御前へ女二にょにの宮みやのほうから粉熟ふすくが奉られた。沈じんの木の折敷おしきが四つ、紫檀したんの高坏たかつき、藤色の村濃むらごの打敷うちしきには同じ花の折り枝が刺繡ぬいで出してあった。銀の陽器ようき、瑠璃るりの杯瓶さかずき子は紺瑠璃こんるりであつた。兵衛督が御前の給仕をした。お杯を奉る時に、大臣は自分

がたびたび出るのはよろしくないし、その役にしかるべき宮がたもおいでにならぬからと言ひ、右大将にこの晴れの役を譲つた。薫は遠慮をして辞退をしていたが、帝もその御希望がとおりになるようであつたから、お杯をささげて「おし」という声の出し方、身のとりなしなども、御前ではだれもする役であるが比べるものもないりっぱさに見えるのも、今日は婿君としての思いなしが添うからであるかもしれない。返しのお杯を賜わつて、階下へ下り舞踏の礼をした姿などは輝くようであつた。皇子がた、大臣などがお杯を賜わるのさえきわめて光栄なことであるのに、これはまして御婿として御歓待あそばす御心みこころがおありになる場合であつたから、幸福そのもののような形に見えたが、階級は定まつたことであつたから、大臣、按察使あぜち大納言しもの下しもの座

に歸つて来て着いた時は心苦しくさえ見えた。按察使大納言は自分こそこの光榮に浴そうとした者ではないか、うらやましいことであると心で思っていた。昔この宮の母君の女御によごに恋をしていて、その人が後宮にはいつてからも始終忘れぬ消息を送っていたのであつて、しまいはまたお生みした姫宮を得たい心を起すようになり、宮の御後見役代わりの御良人ごりょうじんになることを人づてにお望み申し上げたつもりであつたのが、その人はむだなことを知つて奏上もしなかつたのであつたから、按察使は残念に思い、右大將は天才に生まれて来ているとしても、現在の帝がこうした婿かしずきをあそばすべきでない、禁廷の中のお居間に近い殿舎で一臣下が新婚の夢を結び、果ては宴会とか何とか派手はでなことをあそばすなどとは意を得ないなどとお譏そしり申し上げ

てはいたが、さすがに藤花の御宴に心が惹かれて参列ひしていて、心の中では腹をたてていた。燭を手にして歌を文台の所へ置きに来る人は皆得意顔に見えたが、こんな場合の歌は型にはまった古くさいものが多いに違いないのであるから、わざわざ調べて書こうと筆者はしなかった。上流の人とても佳作が成るわけではないが、しるしだけに一、二を聞いて書いておく。次のは右大將が庭へ下りて藤の花を折おつて来た時に、帝へ申し上げた歌だそうである。

すべらぎのかざしに折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり

したり顔なのに少々反感が起こるではないか。

よろづ代をかけてにほはん花なれば今日^{けふ}をも飽かぬ色とこそ見れ

これは御製である。まただれかの作、

君がため折れるかざしは紫の雲に劣らぬ花のけしきか

世の常の色とも見えず雲井まで立ちのぼりける藤波の花

あとの腹をたてていた大納言の歌らしく思われる。どの歌にも筆者の聞きそこねがあつてまちがったところがあるかもしれない。だいたいこんなふうの歌で、感激させられるところの少ないものようであつた。

夜がふけるにしたがつて音楽は佳境にはいつていった。薫が「あなたふと」を歌った声が限りもなくよかった。按察使も昔はすぐれた声を持った人であったから、今もりっぱに合わせて歌った。左大臣の七男が童の姿で笙の笛を吹いたのが珍しくおもしろかったので帝から御衣を賜わった。大臣は階下で舞踏の礼をした。もう夜明け近くなつてから帝は常の御殿へお帰りになつた。纏頭は高級官人と皇子がたへは帝から、殿上役人と楽人たちへは姫宮のほうから品々に等差をつけてお出しになつた。

その翌晩薫は姫宮を自邸へお迎えして行つたのであつた。儀式は派手なものであつた。女官たちはほとんど皆お送りに来た。庇の御車に宮は召され、庇のない糸毛車が三つ、黄金作りの檳榔毛車が六つ、た

だの檳榔毛車が二十、網代車あじろが二つお供をした。女房三十人、童女と下仕えが八人ずつ侍していたのであるが、また大将家からも儀装車十二に自邸の女房を載せて迎えに出した。お送りの高級役人、殿上人、六位の蔵人くろうじんなどに皆華奢かしやな服装をさせておありになった。

こうしてお迎えした女二の宮を、薫は妻として心安く觀察するようになったが、宮はお美しかった。小柄で上品に落ち着いて、どこかう欠点もお持ちにならないのを知って、自分の宿命というものも悪くはないようであると喜んだというものの、それで過去の悲しい恋の傷がいやされたのでは少しもなかった。今もどんな時にも紛れる方もなく昔ばかりが恋しく思われる薫であつたから、自分としては生きていくうちにそれに対する慰めは得られないに違いない、仏になつては

じめて、恨めしい因縁は何の報いであるということが判然することにより忘れることにもなろうと思ひ、寺の建築のことにばかり心が行くのであつた。

賀茂^{かも}の祭りなどがあつて、世間の騒がしいころも過ぎた二十幾日に薫はまた宇治へ行つた。建造中の御堂を見て、これからすべきことを命じてから、古山莊を訪ね^{たず}ずに行くのは心残りに思われて、そのほうへ車をやっている時、女車で、あまりたいそうなのではないが一つ、荒々しい東国男の腰に武器を携えた侍がおおぜい付き、下僕の数もおおぜいで、不安のなさそうな旅の一行が橋を渡つて来るのが見えた。
田舎^{いなか}風な連中であると思ひながら下りて、大將は山莊の内にはいり、前驅の者などがまだ門の所で騒がしくしている時に見ると、宇治橋を来

た一行もこの山莊をさして来るものらしかった。隨身ずいじんたちががやがやというのを薰かおるは制して、だれかとあとから来る一行を尋ねさせてみると、妙ななまり声で、

「前常陸守様のお嬢様が初瀬はせのお寺へお詣りまいになつての帰りです。行く時もここへお泊まりになつたのです」

と答えたのを聞いて、薰はそれであつた、話に聞いた人であつたと思ひ出して、従者たちは見えない所へ隠すようにして入れ、

「早くお車を入れなさい。もう一人ここへ客に来ている人はありますが、心安い方で隠れたお座敷のほうにおられますから」

とあとの人々へ言わせた。薰の供の人々も皆狩衣姿かりぎぬなどで目にたたぬようにはしているが、やはり貴族に使われている人と見えるのか、

はばかりて皆馬などを後ろへ退^{すす}らせてかしこまっていた。

車は入れて廊の西の端へ着けた。改造後の寢殿はまだできたばかりで御簾^{みす}も皆は掛けてない。格子が皆おろしてある中の二間の間の襖^{からかみ}子の穴から薰はのぞいていた。堅い上着が音をたてるのでそれは脱いで、直衣^{のうし}と指貫^{さしぬき}だけの姿になっていた。車の人はすぐにもおりて来ない、弁の尼の所へ人をやって、りっぱな客の来ていられる様子であるがどなたかというようなことを聞いているらしい。薰は車の主を問わせた時から山荘の人々に、自分が来ているとは決して言うなと口どめをまずしておいたので皆心得ていて、

「早くお降りなさいまし。お客様はおいでになりますますが別のお座敷においでになります」

と言わせた。

若い女房が一人車からおりて主人のために簾すだれを掲げていた。警固の物々しい騎士たちに比べてこの女房は物馴ものなれた都風をしていた。年の行つた女房がもう一人降りて来て、

「お早く」

と言う。

「何だか晴れがましい気がして」

と言う声はほのかであつたが品よく聞こえた。

「またそれをおっしゃいます。こちらはこの前もお座敷が皆しまつていたではございませんか。あすここに人が見ねばどこに見る人がございましょう」

と女房はわかつたふうなことを言う。恥ずかしそうにおりて来る人を見ると、その頭の形、全体のほっそりとした姿は薫に昔の人を思い出させるものであると思われた。扇をいっぱいに^{ひろ}拡げて隠していて顔の見られないために薫は胸騒ぎを覚えた。車の床は高く、降りる所は低いのであつたが、二人の女房はやすやすと出て来たにもかかわらず、苦しそうに下をながめて長くかかつておりた人は家の中へいざり入った。紅紫の桂に^{うちぎ}撫子色らしい細長を着、^{なでしこ}淡緑の小桂を着ていた。^{うすみどり}向こうの室は薫ののぞく^{からかみ}襖子の向こうに四尺の几帳は立てられてあるが、それよりも穴のほうが高い所にあるためすべてがこちらから見えるのである。この隣室をまだ令嬢は気がかりに思うふうで、あちら向きになつて身を横たえていた。

「ほんとうにお気の毒でございました。いずみがわ泉河の渡しも今日は恐ろしくうございましたね。二月の時には水が少なかったせいかなよろしかったのでございます」

「なあに、あなた、東国の道中を思えばこわい所などこの辺にはあるものですか」

実際女房は二人とも苦しい気もなくこんなことを言い合っているが、主人は何も言わずにひれ伏していた。袖から見える腕かいなの美しさなども常陸さんなどと言われる者の家族とは見えず貴女きじよらしい。薫は腰の痛くなるまで立ちすくんでいるのだったが、人のいるとは知らずまいとしてなおじつと動かずに見ていると、若いほうの女房が、

「まあよいにおいがしますこと、尼さんがたいていらつしやるので

しょうか」

と驚いてみせた。老いたほうのも、

「ほんとうにいい香ね。京の人は何といっても風流なものですね。こほどけっこうな所はないと御主人様は思召すふうでしたが、東国ではこんな薫香くんこうを合わせてお作りになることはできませんでしたね。尼さんはこうした簡単な暮らしをしていらっしやってもよいものを着ていらっしやいますわね、鈍色にびだって青色だって特別によく染まった物を使っていらっしやるではありませんか」

と言ってほめていた。向こうのほうの縁側から童女が来て、

「お湯でも召し上がりますように」

と言い、折敷おしきに載せた物をいろいろ運び入れた。菓子菓子を近くへ持つ

て来て、

「ちよつと申し上げます。こんな物を召し上がりません」

と令嬢を起こしているが、その人は聞き入れない。それで二人だけで栗^{くり}などをほろほろと音をさせて食べ始めたのも、薫には見馴^なれぬことであつたから眉^{まゆ}がひそめられ、しばらく襖子の所を退^のいて見たものの、心を惹^ひくものがあつてもとの所へ来て隣の隙^{すき}見を続けた。こうした階級より上の若い女を、中宮^{ちゆうぐう}の御殿をはじめとしてそこで顔の美しいもの、上品なものを多く知っているはずの薫には、格別すぐれた人でなければ目にも心にもとどまらないために、人からあまりに美の観照点が違い過ぎるとまで非難されるほどであつて、今日の前にいるのは何のすぐれたところもある人と見えないのであるが、おさえが

たい好奇心のわき上がるのも不思議であつた。尼君は薫のほうへも挨拶さうを取り次がせてよこしたのであるが、御気分が悪いとお言いになつて、しばらく休息をしておいでになると、従者がしかるべく断わつたので、この姫君を得たいように言っておいでになつたのであるから、こうした機会に交際を始めようとして、夜を待つために一室にこもっているのであらうと解釈して、こうしてその人が隣室をのぞいてみると知らず、いつもの薫の領地の支配者らが機嫌きげん伺いに來て重詰めや料理を届けたのを、東国の一行の従者などにも出すことにし、いろいろと上手じょうずに計らつておいてから、姿を改めて隣室へ現われて來た。先刻ほめられていたとおりに身ぎれいにしていて、顔も氣品があつてよかつた。

「昨日お着きになるかとお待ちしていたのですが、どうなすって今日もこんなにお着きがおそくなつたのでしょうか」

こんなことを弁の尼が言うと、老いたほうの女が、

「お苦しい御様子ばかりが見えますものですから、昨日は泉河のそばで泊まることにしまして、今朝も御無理なように見えましたから、そこをゆるりと立つことにしたものですから」

姫君を呼び起こしたために、その時やつとその人は起きてすわつた。尼君に恥じて身体を^{からだ}そばめている側面の顔が薫の所からよく見える。上品な眸^めつき、髪のごあいが大姫君の顔も細かによくは見なかつた薫であつたが、これを見るにつけてただこのとおりであつたと思ひ出され、例のように涙がこぼれた。弁の尼が何か言うことに返辞をす

る声はほのかではあるが中の君にもまたよく似ていた。心の惹^ひかれる人である、こんなに姉たちに似た人の存在を今まで自分は知らずにいたとは迂闊^{うかつ}なことであつた。これよりも低い身分の人であつても恋しい面影をこんなにまで備えた人であれば自分は愛を感じずにはおられない気がするのに、ましてこれは認められなかったというだけで八の宮の御娘ではないかと思つてみると、限りもなくなつかしさうれしさがわいてきた。今すぐにも隣室へはいって行き、「あなたは生きていたではありませんか」と言い、自身の心を慰めたい、蓬萊^{ほうらい}へ使いをやつてただ証^{しるしかんざし}の簪だけ得た帝は飽き足らなかったであろう、これは同じ人ではないが、自分の悲しみでうつろになつた心をいくぶん補わせることにはなるであろうと薫が思つたというのは宿縁があつたもので

あろう。

尼君はしばらく話していただいただけであちらへ行ってしまった。女房らの不思議がつっていたかおりを自身も嗅^かいで、薫ののぞいていることを悟ったためによけいなことは何も言わなかったものらしい。

日も暮れていったので、薫も静かに座へもどり、上着を被^きたりなどして、いつも尼君と話す襖^{からかみ}子の口へその人と呼んで姫君のことなどを聞いた。

「都合よく私がここで落ち合うことになったのですが、どうでした私
が前に頼んでおいた話は」

と薫が言うと、

「仰せを承りましてからは、よい機会があればとばかり待っていたの

でございますが、そのうち年も暮れまして、今年になりましたから二月に初瀬参りの時にはじめてお逢いすることになったのでござい
す。お母さんにあなた様の思召しをほのめかしてみますと、大姫君と
はあまりに懸隔のあるお身代わりでおそれおおいと申しておりました
が、ちょうどそのころはあなた様のほうにもお取り込みのございました
ところで、お暇ひまもないと承っておりますし、こうした問題はことに
またお避けになる必要があると存じましてその御報告をいたしますこ
とも控えておりました。ところがまたこの月にもお詣りまいをなさいまし
て、今日もお帰りがけにお寄りになったのでございます。往復に必ず
おいでになりますのもお亡なくなりましたました宮様をお慕いになるお
心からでございましょう。お母さんがさしつかえがあつて今度はお一

人でお越しになったものですから、あなた様が御同宿あそばすなどとは申されないのをございます」

こう弁の尼は答えた。

「見苦しい出歩きを人に知らすまいと思つて、客は私だと言うなど言つておきましたが、どこまで命令は守られることかあてにはありません。供の者などは口が軽いものですからね。だからいいではありませんか、一人で来ていられるのはかえつて気安く思われますからね、こんなに深い因縁があつて同じ所へ来合わせたと伝えてください」

と薫が言うと、

「にわかな御因縁話でございますね」と言い、

「それではそう申しましょう」

立つて行こうとする弁に、

かほ鳥の声も聞きしにかよふやと繁^{しげ}みを分けてけふぞたづぬる

口ずさみのようにして薫はこの歌を告げたのを、姫君の所へ行つて
弁は話した。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
